

徳川實紀資料

十

共十二

特別  
95  
3072  
11



明印  
3072  
卷11A

芝蔭



芝蔭

芝蔭

後多し後を多し

之れより分つれり

芝蔭

芝蔭

芝蔭

芝蔭

芝蔭

芝蔭

宜急度年一信之能令  
此方蓋州双橋佳者一燈  
於人必為之高年之宜

丁卯年

今之風吹所至如台之  
多如風台制台  
上善所以能知之如台之台  
即之善也能之之如台之  
沙之之為之之之之

為

丁卯年

安西書局

卷之五

今晩のうしひをわすれし  
るらんや誠を信ふ  
ふとていふ片を信じて

平のり

也

中松を敬す

読者(在平)

心は於て丸清の案とてし必  
此を成せざる事(口は拘執  
乃て為すや此の之を控誦し

平のり

也

増田加賀守

也

大橋新吾

也

此心之極也。是謂以故子之口語之  
以酒之不能集之口語之亦中  
所言之俄下包成之也  
如知之始。今日之物在之機  
始能<sup>海</sup>而卒之。私之古愛之也。以  
見其有之也。以於其也。

二  
一

忠信  


海行澄海  
子信

新學文法

何しゆんらん心持能くく之れ  
らに為るしりりも心からく之れ  
心持するしりり心持する

口氣なりり何しゆんらん心持能くく之れ  
一ちりり心持能くく之れ  
何しゆんらん心持能くく之れ  
新ししかたれりり心持能くく之れ

今夕は岸らるる  
清く

二日書

毒

今夕は岸らるる

新ししかたれりり心持能くく之れ

は月

心持するしりり心持する

口舌分作

酒升禮海

三三三

中一能之彼之...  
中一能之彼之...  
中一能之彼之...  
中一能之彼之...

一...  
中...  
之...  
以...  
夜...  
之...  
之...  
之...

二〇〇

五

永井信徳

書致

大橋信平

書中

上様市橋姫孫能く成り奉りて  
其志を以て承りていふに  
是れは其の心切に  
以て是れを以て承りていふに

各、是行就て御心切に報  
せしむるに不承り申上り  
如く言はれし如く承りて

二〇〇

力

小越

大橋信平

書中



そ度氣色いりて  
あまのきり

とくし合

中よりこねて  
作越の櫻列下

中よりこねて  
あまのきり

千のり



内位法印

法華文法印

そりてのり  
あまのきり

中よりこねて  
あまのきり

千のり  
あまのきり

法華文法印  
小御印

あまのきり  
あまのきり

あまのきり  
あまのきり

あまのきり  
あまのきり

心はこころしきれくとも新  
玉何分<sup>は</sup>心は何の何の  
心は<sup>は</sup>ありて心は<sup>は</sup>ありて清<sup>は</sup>  
有りて

三

何れ海<sup>は</sup>

読者<sup>は</sup>

何れ海<sup>は</sup>天氣能くそと<sup>は</sup>あり  
成<sup>は</sup>なりて但馬<sup>は</sup>なりて中<sup>は</sup>振<sup>は</sup>て  
中<sup>は</sup>なりて

一筆<sup>は</sup>中<sup>は</sup>なりて天氣能くそと<sup>は</sup>あり  
そと<sup>は</sup>ありて但馬<sup>は</sup>なりて中<sup>は</sup>振<sup>は</sup>て  
中<sup>は</sup>なりて

有りて

三

保美の長

新交文壇

新しき名はとこりしんしつ  
新しき名はとこりしんしつ  
新しき名はとこりしんしつ  
新しき名はとこりしんしつ  
新しき名はとこりしんしつ

三和宮居元丸  
おらんてん  
おらんてん

はなをいり指のくつら  
はなをいり指のくつら  
はなをいり指のくつら  
はなをいり指のくつら  
はなをいり指のくつら

つりま

毒

酒野澄子

高橋文子

つりま

為一但例も不ふ所也、よれ言  
之、所、之、氣、相、あ、く、は、花、あ、も  
り

今日二妃、く、亭、主、と、作

付、四、時、分、六、と、な、る

如、標、！ 行、言、く、て、音、電

城、を、下、り、れ、今、講、了、し、

六、廿、七、日

秀

本稿法年

朽民部少

う、し、こ、み、さ、は、為、如、を、

ふ、り、て、も、口、も、け、ら、る、ら、あ

如、名、あ、い、と、な、し、こ、ら、あ、は、

如、々、二、こ、丸、は、毫、城、下、は、名

如、々、三、つ、た、り、の、と、め、の、あ、

如、

ち、り、り

如



主客論

か

元、但、其、此、為、其、一、也、  
其、身、子、之、也、似、此、也、

此、之、也、其、中、乃、之、也、

乃、其、也、

也

龍卷

少、城、也、

此、之、也、其、中、乃、之、也、  
此、之、也、其、中、乃、之、也、  
此、之、也、其、中、乃、之、也、  
此、之、也、其、中、乃、之、也、  
此、之、也、其、中、乃、之、也、

九月廿日

也

中、松、也、

松、卷、也、

いふ所のさゆらけをねんて先不  
との 歩みよむかぬなり  
さきしんらぬる名品と云  
之儀と名  
そとそたしつらゆをい善言  
のらむ能くあるは 心  
をくしんりゆ  
ゆきしんりゆ  
ゆきしんりゆ

ありて

道

中根

新

とくさし水清二凡さ  
は合 沙定とらぬ  
能く方りて  
成く候し

三三作之巻

十月十日

近

中根甚好

然其法下

合新下の二海集して其有

之倉城之其評定場新内への

わの胡一之二十万也其し

昔其するをるは其を言ひ向へ

向れ其人の中よりとて其とい井

之をて其し毎交りて其の

其家其評定場や其の評定を

集りて其評定場や其の評定を



今中一高段以初あしき

新しあふりあしき

新あしき

吾あしきあしき

新あしきあしき

忠のりい花あしきあしき

あしきあしき

あしきあしき

あしきあしき

あしきあしきあしきあしき

あしきあしきあしきあしき

あしきあしきあしきあしき

あしきあしき

あしき

酒中隱居

新考文法

可分之法  
局中隱居  
可分之法  
局中隱居

新考文法

新考文法

新考文法

東三入之... 唯今也... 亦之... 之...

辛酉年...

...

...

...

...

...

...

...

しる柳生傳と号下を亂るあ  
ふるまふ方と少治とを公を  
とる

十二月廿六

朽木良歌あ

龍卷

少の氣六ヶ未取  
心身しつらと体てつれおる  
ふまふ方と少治とを公を  
とる

十二月廿六

五

高橋内あ

五七

少中 唯今 予く 之 誠 下 所 名  
以 善 之 言 乃

永 升 位 德 小 城 在 以 但 百

乃 中 之 事 乃 山 里 口 殺 家 有

三 之 法 以 宗 事 乃 乃 乃 乃 乃

城 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

市 三 三 乃 乃 乃 乃 乃 乃

惟 乃 乃 乃

中 招 乃 乃 乃

於 乃 乃 乃 乃

任 乃 乃 乃 乃 乃

山 狀 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

十 乃 乃

乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃

あし家かかきとあはれ  
一徳をさしきりてまゝの  
うけとえんきとてこねき  
むらあのかたをさしきり  
おしき

とくあんくあはれ  
一葉りけりあはれ  
あし口をさしきり  
あしきり

あしあはれ  
あしあはれ

あしあはれ

あしあはれ

あしあはれ

あしあはれ

あしあはれ

之屋名只通奇

乃日一法之法

五

之流一三六たらるる如これ

うくは

之流一三六たらるる如これ

まのつみか

金永之積満

整

寛永甲中之春

一 冲古

作粟田口及古元別國  
銘有在納之改古象眼者

孫袋名出流し箱外箱湛陰

一 利劔

作古系真守銘有在納之  
以古象眼者

孫袋有右回箱

一 軍鑑之大星

以象牙作之

孫袋湛陰箱之色信紫

一 法華經一部

管家神蹟俱紙金泥  
此經書亦肉山以紙為  
後得澤庵和尚

蜀錦之囊梨地府經之箱和等一卷

一 心經一卷

此經書原真跡  
與書澤庵和尚

表紙錦村梨地府經之匣子包衣紫

一 後撰集卷之實衣傷和等一卷

伏見院宸蹟  
此集書青蓮院書純

濃紫之囊梨地府經之函箱之袋紫菊  
大紋匣子

一 詩奇手本一卷

伏見院宸蹟  
此集書高純親王

紫縞紗之色衣梨地府經之匣

箱之袋純地之純子

一 消息手本

後光嚴院宸蹟  
此集書高純親王

紫之囊梨地府經之匣箱之袋紫如八丈

一 雜業律身一卷

尊圓親王在草  
此集書高純親王

紫之絨衣梨地府經之匣箱之袋

前黃純子

一 詩歌色紙二千六枚



宣和親王山真蹟  
內真書字純親王

折本之表紙在池金襴紫包衣匣後

身塗之箱

一 同七十二枚

尊圓親王真蹟  
內真書字純親王

折本之表紙青地金襴包衣右同箱

一 歌仙之和歌百八首之一卷

尊遠親王山真蹟  
內真書字純親王

淡黃之囊和苑前紙之箱如之袋

少紋紙子

一 三首傳歌之懷紙二十一枚一卷

宣永甲戌之秋  
禁裏山會之筆蹟

表紙前黃紙子淡黃之包衣湛塗之箱

一 一首和歌之懷紙二十一枚一卷

宣永乙亥春  
重字輕尾附會之筆蹟

表紙少紋紙子同包衣口右女書卷

內真書字純親王

一 短冊二百二十枚之一帖

宣永甲戌之秋  
禁中五卷之筆蹟

因之矣之春重字序

亦名名良序之自派自筆

表紙小紋之純子深緋之三色包湛漆之

箱右一紙之真書為純親王

一釋迦羅漢之繪像

宋朝僧月蓬筆  
裏書頌心居士

表具緝綾湛漆漆相同外相

一鷲之繪

徽宗皇帝宸蹟  
贊澤庵和尚

表具前黃純子黑漆之箱

一鍾馗之繪

元朝顏輝社月筆  
贊相國寺脾長老

表具公箱右月

一白馬之書畫

趙子昂真跡  
真書跋詩南律寺最嶽和尚

表紙青地之金深包衣紫推衣箱之袋

紋八丈

一篆字之書畫

大明臺山師筆  
真書跋詩相國寺橫長卷

一硯

子深漆之相栴色之囊衣入

一花瓶

号波香  
之石硯

袋青地之純子湛漆之箱

一 青磁香爐

号三海堂

餘之袋蓋亦

一 堆紅盆

号珊月  
長成作

左地金襴之袋

号玉昌

一 銀盆

紫地之種子之袋

右京同相和地府經已九菊之上裏心也父

一 翁之面

日光作之模

錦袋之包白箱詰摩箱

一 三日月之面

作

左地金襴之袋

一 山姥之面

作

黄地之金襴袋

一 乙卯花之面

作

紫地金襴之袋

一 五色鏡

筒虎竹彫物

左地金襴之袋包之衣紫系二重有之

右件之平六亦御室前之奉納沓

中武運長久之其基忘民時在侍者也

一福東一院法平

寛永廿一年甲申七月十日 快後直

惣寺年秋快存

神主或部

可房

大橋氏式部卿法平龍慶

早春

あさるこつあくあつまうらわ世とてくは日乃

むらうら花とやゆさき春ハ来よやゆわ

を白叶そ取し所

字は字万歳と

朝霞

うら浪乃若もかよめらる船あつこり

いりこいこいこいこいこいこいこい

谷鷺

せとくさるこい若れ戸いこいこいこいこい

いふをのりともふはふくはき

残雪

うしろの雪は— 雪はふりつゝはまはるるも  
うしろの雪は— やまをのりつゝはるるも

若菜

たうらふとあはれよきめくこきゆ人き  
こきゆにつらふつゝふたつふたつ  
うらりし

里梅

いふはれをのりつゝはるるも  
人きゆつゝはるるも

新梅

こきゆつゝはるるも  
梅はつゝはるるも

去月

いふはれをのりつゝはるるも  
去月をのりつゝはるるも

春曙

あけぼのの雲はしらをすく

あけぼのの雲はしらをすく

海鳥

せうせう四月

こいねを

らね

むらさき田舎の鳥はしらをすく

あけぼのやあけぼのやあけぼの

春雨

とくしあけぼののうもくをすく

あけぼののうもくをすく

岸柳

うしろの柳はしらをすく

あけぼののうもくをすく

侍花

あけぼののうもくをすく

あけぼののうもくをすく

初雪

いふ歌も花一ふさ暖らと竹花を  
そへたさひあらあつらへしをよむ

見花

を親友の歌  
も解

たの神をかくせけり見らゆ  
あはれとてあはれはゆり

花盛

い海にさうらをうたぐりかく風を  
志すまを花のさうらをうたぐり

落花

おととく歌人のたぐい見とてあはれ  
ちり花とちりぬ紫とれはあはれ

観冬

これの言のついで  
可憐な言のついで

むしあはれくいとてあはれ観冬  
あはれいとてあはれ花の暖ら

池邊

岸のついであはれそふ浪や松の枝よ

かゝる後や久し池乃中魚

暮春

ひくしてしはるを<sup>これ</sup>夢ともいふはとも  
こころよく言ひやうふはもあるが

更衣

かきかえたとあはれに衣もたらか  
糸心のなを乃あしはるのうら

卯花

う花乃をけりるをいかにむき  
きと人やお花をいよとるを

侍子規

せいのやうや人しをあはれか  
みらけまゝいあはれとそらふ

岡郭云

う花乃をいよとるをいよとる

まゝいよとるをいよとる

相つゝいよとるをいよとる



ふいふふのまじしんちな海色  
のまじしんちなとあり  
ふいふのまじしんちなとあり

取御橋

たらしのまじしんちなとあり 宿あり

まじしんちなとあり

早苗

いりれまじしんちなとあり

こまじしんちなとあり

五月雨

あえまじしんちなとあり

あまじしんちなとあり

鶴川

むまじしんちなとあり

かまじしんちなとあり

藪虫

けまじしんちなとあり

まじしんちなとあり

夏草

あはれいづれも道ゆく人もあはれくもいづれ

いづれゆく人もあはれいづれもいづれ

夏月

いづれゆく人もあはれいづれもいづれ

あはれいづれも道ゆく人もあはれくもいづれ

夕立

いづれゆく人もあはれいづれもいづれ

あはれいづれも道ゆく人もあはれくもいづれ

杜蟬

あはれいづれも道ゆく人もあはれくもいづれ

いづれゆく人もあはれいづれもいづれ

扇

あはれいづれも道ゆく人もあはれくもいづれ

いづれゆく人もあはれいづれもいづれ

夏萩

あはれいづれも道ゆく人もあはれくもいづれ

あはれいづれも道ゆく人もあはれくもいづれ

あうせふ水のうらむじつりり

早秋

いほまきくものよふに暮れ来る  
うらめつしき秋風はゆ

七夕

あうひもやまにありての雲の  
あうまなうさうさうさう

萩風

あうまなうさうさうさう  
あうまなうさうさうさう

萩露

あうまなうさうさうさう  
あうまなうさうさうさう

女郎花

あうまなうさうさうさう  
あうまなうさうさうさう

信濃みちりきん

夕虫

夕のあけのそら  
夕のあけのそら

夕のあけのそら  
夕のあけのそら  
夕のあけのそら  
夕のあけのそら

秋夜

秋の夜は静か  
秋の夜は静か  
秋の夜は静か  
秋の夜は静か

初雪

初雪の降る  
初雪の降る  
初雪の降る  
初雪の降る

源君天下に補佐  
源君天下に補佐  
源君天下に補佐  
源君天下に補佐

朝春おとせ  
朝春おとせ  
朝春おとせ  
朝春おとせ

甲戌の秋  
甲戌の秋  
甲戌の秋  
甲戌の秋

秘ししきくちつら世さるはし  
法寺法くまのりあときく長月心  
正念つこしか法津社みちふくし  
ゆりてきや

東照大権現みとぶのもしをう  
乃うしそよといこきそ百につく秘  
日光山みちを法くまを殿りて  
しゆりてきや

武部卿法不龍慶

あらしきくちつら世さるはし

秋夕

うそやけらよのこくまはくし  
妹のゆりてきやあななりを利

山月

たらきくちつら世さるはし  
山法くまを法くまはくし

野月

いづれかあつひの月をかくしよきぬ

ま〜のあつたにむきあうし〜

河月

あつた〜の舟〜とあ〜河〜

くはら〜月れ新もさむやと

江月

び〜あ〜の葉〜けに月〜

ゆ〜う海〜り菰波江〜

浦月

あつた〜のう〜れ〜か大〜け〜

は〜ら〜あ〜ら〜た〜

薙菊

び〜さ〜ひ〜く〜葉〜ら〜霜〜

あつた〜のい〜り〜を〜

栞夜

と〜え〜ぬ〜あ〜ら〜く〜時〜

秋の心もさくさくしてゆく

暁房

うららかな朝の光に  
あふはるの光  
あふはるの光

墨紅系

あふはるの光に  
あふはるの光  
あふはるの光

庭印系

うららかな朝の光に  
あふはるの光  
あふはるの光

九月抄

あふはるの光に  
あふはるの光  
あふはるの光

初冬

あふはるの光に  
あふはるの光  
あふはるの光

時雨

あつたしそ色あまむしりしれくもら  
しつれをのことなふおそくし舞

落葉

ひそれ水乃あつたしそ色のあつたまて  
はともめ落葉やいかにあつたまて

朝霜

をありい流る目款よのころ物霜を

さあ~~~~水たみあこあつたまて

寒草

あつたまて  
くそつれ

~~~~~くそつれあつたまて  
みゆあつたまてこほつたまて

子鳥

~~~~~あつたまて月つたまて  
~~~~~あつたまて浪やたつたまて

水鳥



うらむきくむらびくく為れふ〜  
く〜ま〜と〜道〜も〜め〜い

氷初結

せれあうこころうたえし抱ふとちもあ〜みさ〜りわ

ひと〜ひ〜あ〜め〜あ〜こ〜ほ〜り〜れ

冬月

うと〜め〜れ〜月〜を〜こ〜ろ〜う〜〜を〜れ〜め〜れ

く〜あ〜な〜い〜ふ〜山〜お〜り〜〜れ〜う〜路

おきしゆえ風のこゑたゆらぐは  
こゆるし副妻めれした

一葉に同じ布うのこころうらぐく  
つむぎをう

春將

た〜る〜せ〜る〜あ〜ら〜れ〜抱〜く〜あ〜と〜あ〜〜も〜れ

ひ〜う〜の〜あ〜ら〜〜ら〜あ〜ひ〜の〜一〜さ

野麥

い〜よ〜〜〜〜あ〜わ〜ら〜〜〜あ〜れ〜あ〜ん

あ〜く〜ら〜の〜あ〜〜あ〜ら〜ら〜ら

浅香

い〜ま〜り〜れ〜初〜儀〜の〜河〜〜〜あ〜ら〜ら〜る

浅瀬のさきとみゆるはつり

積雪

む月を竹まきをもほしてゆく  
ありはしらぬる雪はだんま

田中君

あふとにいづれをせらるるいづれをかへしいづれをを  
まよのほろひはつゆささるる

歳暮

むく竹乃一ふ魚さそく  
美びとるりにとそくれある

寄山彦

とやきんと志らくをおよたしくちちりちり  
あしゆもみぬこひのやさふ

寄岩彦

うさのそくにありてそくたふらいあれ  
あつらひ月を見さるる

寿杜慈

世にありぬ神はるみいふかゝいふかゝ  
いふかゝいふかゝいふかゝいふかゝ

壽実慈

うきうきと人めれ世の志はるいふかゝ  
いふかゝいふかゝいふかゝいふかゝ

壽是慈

たそくれにさすも世と世の志のいふかゝ

志のいふかゝいふかゝいふかゝ

壽野慈

いふかゝいふかゝいふかゝいふかゝ  
いふかゝいふかゝいふかゝいふかゝ

壽原慈

いふかゝいふかゝいふかゝいふかゝ  
いふかゝいふかゝいふかゝいふかゝ

壽河慈

むはよもあつたむらさきのなも比かき  
さうぬうぬいもあつたむらさき

寄江恋

あまこねをなむひきくもれ橋は乃  
あな能ひさうな契りさうなるさ

寄浪恋

むも秋来甲身あつねもくれぬ乃  
あつたさうひをきる人そあつた

寄澤恋

あけにさうはくもさうもさういぬも  
あつたあつたさうとあつたさう

寄池恋

うもせうあつたのいぬ乃いぬいぬ  
うもせうあつたのいぬ乃いぬいぬ

寄湖恋

せんをさうと滝津さうあつたさうさう

はるまき一々の  
あつた

うらふらふと花は花ありありある

寄梅恋

うらふらふをこひつらふ花はつらふ

あまの淵は瀬よかたぬき

寄海恋

たこはうらや浪うらうらふむき

色はもおもふ夜はゆらりを

寄浦恋

いさりの火は秋をさききりうら風

あまのうらささのむきひるのむら

寄濱恋

あひらびの波のまきこれかたぬき

いさやうらふもさききりあり

寄湊恋

あまのうら八十の湊をいさらふ

うらふらふありありありあり

いさらのうら

いさらのうら

うらふらふ

いさらのうら

うらふらふ

寄鴻意

阿のこく  
まや  
う

ひのうらまのあつをうまに  
室のつをまのなま

浦松

うらまのあつをうまに  
室のつをまのなま

宗舟

うらまのあつをうまに

葉分りり見次宗宗乃月うふ

山家嵐

勢むのいもあ  
山をとりのり

田家

うらまのあつをうまに  
山のとりのり

霧旅

あつをうまに  
うらまのあつをうまに

身はまゐるまゝに流るる一のありて  
雲分るるもやははまじらふなり

迷懐

いづこひうなきひいでし色ありひい糸  
とまわらざるもまじらふなり

懐舊

日月逝矣歳二我之  
今もあらずや別川殊に

とらふ心ひ出をいみし  
く糸よみ流の糸覚るる

神祇

おろしつや祇の雲戸を今も代り  
おろし人乃ち流るるなり

尺教

流るる

きつ流るるあうしそ有るぬ  
世におよぶ法乃ちららふ

祝言

むしんそ<sup>流るる</sup>か<sup>ぬ</sup>流代は流くとる

陰かげよりわきまき民のめをこころし

汚辱軍三句

長歌一

ろりく初号ら非の細き一  
治とはまきみ七の白妙しそわそわ  
由とふれさる一山席とわく  
又侍らふも忠義の氣をなす  
ま上程の風をまといしわをわく

中ちゆうのうーぢーとのわく  
なまけしそとみよわらそを  
玉のひかりあられそるなれ  
とれそるさるひはそるなれ  
一蹴ろりつとそらるるなれ  
ゆらとふれみゆらわらし  
あなうしこ

山一考をもわく別語をわく  
女三席



光廣の業

今更に十と路カニ月行るらん  
かとおち中けりは使ふく我々の  
江戸よくまわりの所へりては  
けあう。くしよかきひて富を  
銀山のとみえよけり

つらかりそよきんおのなるてを  
名前のすこしあきこのころ

五

澤庵筆

自鼓琴

溪庵

於龍芝法下辛真

居竹林アリ

主是賢人隱竹林々々送爾等少也

知音風吹細々鳴琅碧不柱不絃

碧琅ハ竹ン

自鼓琴

二祖大鏡集上下二卷トシ文字改ハ

時宗和歌傳授系圖

之祖ノ御号ト二祖ノ御  
歌トテ假名ヲ能クアラ  
クメ集テム宗祖ノ草  
庵集ト名付テ此ハ  
宗祖草庵一巻トスニ

權大納言為家

釋阿

安嘉門院阿伴房

權中納言為知

暁月房

金蓮寺他阿真教

二祖ノ  
御証系

同寺淨阿弥陀佛

同弟子頓阿草庵筆

藤澤切阿弥陀

詞林桑葉集  
源氏抄廿卷神道傳授之

宗祇法師

古今傳授 駿州今川より 遊行廿九代他阿

一華堂兼阿 同弟子切臨阿 遊行二十

九代上人 同弟子故上人他阿

一遍宗二祖草庵集 頓阿草庵集 續草庵集  
今時の釋尊一方風の草庵集の源流や

頓阿草庵集の源流を考へたものも尋ねありあはれは、宗流の中心は  
より在りて流の中心にありておぼえのより考へるべきなり。頓阿の  
味能なるの方とて是をいひては、心外論の考へる  
おぼえなりや。よふたすし、いふたすし、いふたすし  
わづらひの傳授とて、後家宗とて、五流の考へ  
たりとの中に、宗の考へとて、後家宗の考へたり  
は、後家宗に考へるべきなり。二條家を考へる

後家宗を傳授とて、いふたすし

曉月房の由流を梅月堂阿より、いふたすし  
とて、いふたすし、いふたすし、いふたすし

茲傳閑山四代上人ト者又ハ相模國大森左馬の乃通  
母ハ後家宗皇女ト娘ナリヤ、ト三祖上人ト傳  
寺ニテ今入戒以兼遊行相續ト

橋長多事

中一法...  
十...  
し

心...  
之...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

海之

三十一

古風

此は古風なり一文字自に古風なり  
新風の流るる所なり

善の善なる所 流るる所 礼の禮  
は流るる所 礼の禮なり 目方  
裁作 美の美なる所 善の善

一折は外は意は示す所なり  
面端は良なり 伸は公の徳なり

三十一

善

わきまの伸は徳の徳なり  
伸は公の徳なり 伸は公の徳なり  
伸は公の徳なり

徳の内は徳の徳なり



そのうしきれとら中ふた  
のりし紙の中  
とらてまの世時平ま履  
は年し林いつりあ  
は年し林いつりあ  
うらまやう細  
来しとまの科  
し名い廣徳三と中作  
ナリ  
戸田伊賀屋  
し

根子能くわの痛  
席の敷を  
は年し林いつりあ  
うらまやう細  
来しとまの科  
し名い廣徳三と中作  
ナリ  
戸田伊賀屋  
し

十少のいふ事なまゝに  
三三三を何ともしら

中快を洋にしてみたり

いふことありしを  
る前し首を油をい

いふことありしを  
安ん定んか後し

十三といふ方より

大なるいふ事なまゝに

十三といふ方より  
いふことありしを

いふことありしを

いふことありしを

いふことありしを

いふことありしを

いふことありしを

いふことありしを

いふことありしを

いふことありしを

いふことありしを



和主十中百を所する所集り下  
取しするの事や一必々集り  
下しし神紀より如くとも集り  
と如く一様ありし事記  
りし

あくあくは紅紙のりて悪風は  
能く御座りし同よのりて被探り  
信善信ら如くは私にまよひて  
自是迄後者後少少の山出ん  
被探りし事にははれぬ事  
その中の用の中へは  
亦亦好し法にやか  
の事一は地震し  
心使しは枕より一は法に

本年の秋は地味重く甚く

ふく<sup>一</sup>氣と毒ね<sup>一</sup>と<sup>一</sup>名<sup>一</sup>の<sup>一</sup>也

事し先<sup>一</sup>の<sup>一</sup>今<sup>一</sup>初<sup>一</sup>年<sup>一</sup>の<sup>一</sup>白<sup>一</sup>鳥

多<sup>一</sup>く<sup>一</sup>に<sup>一</sup>主<sup>一</sup>の<sup>一</sup>身<sup>一</sup>一<sup>一</sup>及<sup>一</sup>云<sup>一</sup>の<sup>一</sup>行<sup>一</sup>り<sup>一</sup>也

物<sup>一</sup>の<sup>一</sup>社<sup>一</sup>の<sup>一</sup>神<sup>一</sup>事<sup>一</sup>と<sup>一</sup>して<sup>一</sup>祥<sup>一</sup>有<sup>一</sup>

之<sup>一</sup>如<sup>一</sup>の<sup>一</sup>田<sup>一</sup>中<sup>一</sup>の<sup>一</sup>行<sup>一</sup>り<sup>一</sup>也

之<sup>一</sup>房<sup>一</sup>の<sup>一</sup>差<sup>一</sup>越<sup>一</sup>上<sup>一</sup>挽<sup>一</sup>也<sup>一</sup>母<sup>一</sup>の<sup>一</sup>是<sup>一</sup>也

此<sup>一</sup>方<sup>一</sup>の<sup>一</sup>心<sup>一</sup>を<sup>一</sup>定<sup>一</sup>て<sup>一</sup>行<sup>一</sup>り<sup>一</sup>也

好<sup>一</sup>の<sup>一</sup>控<sup>一</sup>り<sup>一</sup>事<sup>一</sup>一<sup>一</sup>同<sup>一</sup>也<sup>一</sup>有<sup>一</sup>存<sup>一</sup>り<sup>一</sup>

福<sup>一</sup>多<sup>一</sup>く<sup>一</sup>有<sup>一</sup>也<sup>一</sup>事<sup>一</sup>を<sup>一</sup>行<sup>一</sup>り<sup>一</sup>

好<sup>一</sup>又<sup>一</sup>之<sup>一</sup>友<sup>一</sup>也<sup>一</sup>好<sup>一</sup>又<sup>一</sup>之<sup>一</sup>友<sup>一</sup>也<sup>一</sup>

好<sup>一</sup>又<sup>一</sup>之<sup>一</sup>友<sup>一</sup>也<sup>一</sup>好<sup>一</sup>又<sup>一</sup>之<sup>一</sup>友<sup>一</sup>也<sup>一</sup>

好<sup>一</sup>又<sup>一</sup>之<sup>一</sup>友<sup>一</sup>也<sup>一</sup>好<sup>一</sup>又<sup>一</sup>之<sup>一</sup>友<sup>一</sup>也<sup>一</sup>

好<sup>一</sup>又<sup>一</sup>之<sup>一</sup>友<sup>一</sup>也<sup>一</sup>好<sup>一</sup>又<sup>一</sup>之<sup>一</sup>友<sup>一</sup>也<sup>一</sup>

好<sup>一</sup>又<sup>一</sup>之<sup>一</sup>友<sup>一</sup>也<sup>一</sup>好<sup>一</sup>又<sup>一</sup>之<sup>一</sup>友<sup>一</sup>也<sup>一</sup>

好<sup>一</sup>又<sup>一</sup>之<sup>一</sup>友<sup>一</sup>也<sup>一</sup>好<sup>一</sup>又<sup>一</sup>之<sup>一</sup>友<sup>一</sup>也<sup>一</sup>

好<sup>一</sup>又<sup>一</sup>之<sup>一</sup>友<sup>一</sup>也<sup>一</sup>

好<sup>一</sup>又<sup>一</sup>之<sup>一</sup>友<sup>一</sup>也<sup>一</sup>

故其好初分其後之至書狀云

中分初化以物之其後年丁也

其初之執抄之改及書舒

皆抄調うるを同い名に記す也

是沙沙國之名大書不可

古事記にハ撮し以てハ其來し也

己之ハ以天神に以て其來し也

ハ其來し也其來し也其來し也

在之其後之其沙沙其來し

別ハ其來し也其來し也

其在之其後之其沙沙其來し

其のハ其來し也其來し也

其のハ其來し也其來し也

ナリ其來し也

其のハ其來し也其來し也

其のハ其來し也其來し也

其のハ其來し也其來し也

し

その地の人口を考へしし終ら

目録を以て其の地方を考へ

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

その地の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら

其の人口を考へしし終ら



此らむりこひのしる事なるを居るく  
たのりく海斗しとてい  
年しを名時たふ風におくりし  
高りうりてそ気かあふとほ  
く中しをら吹てしとねふ存し  
身しあふそふをるのいなきゆ  
明ら半を原用りか来しとす  
くぬらりしとぬりてぬ  
けふ年をりんあふ何は陰の  
不中らるしとる梅花もさうり  
下中かをくをさしとあふ  
ふありしと一のらるびもあふ

は佳節なりしのをすかひの  
そよひと終しとす候を  
そよひ候もいとす  
あふありしと  
あふとそよひとす  
下候節もあふし  
あふく風も吹りてあふ  
あふ  
あふをのりかてし  
あふ  
あふもあふ  
あふ

つねにまじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりて

外 海島負出極そり方

目的及る所つてつてつてつて

美心習ふと相月々も何所夜

極めゆきつて極め極め

大風雨にまじりて極め極め

まじりてつてつてつて

存出つてつてつてつて

つてつてつてつてつて

つてつてつてつてつて

つてつてつてつてつて

つて

目的及

所へ通は下へつたにけれし  
其のつ封趣し用事し中  
くした居てなり我より  
いなるはとつ初と趣し  
其院よりあり方のまら  
つ趣し中し何とてし  
しと趣し中し何とてし  
しと趣し中し何とてし  
しと趣し中し何とてし  
しと趣し中し何とてし

中

中  
中



江の島を新し日也し何と云  
田原の事いふ方めい中成しくねあは

を道方入の意に取らるるを

と解らむし之りやのし美

何れに候か時之を能くし

美らしたる方らぬをいふ

物も道も悪くしる明ら

中しゆらふ言もは

集事 是の明海の子

集りしは

名もは

之の

ふも

を道に

言由も

多し

是れ

子し

昔の

面

子時

二

明

わ

そ

そ

赤又万端之付あさうせり  
中洲くくくくくくくくくく  
中洲くくくくくくくくくく

赤松書之海月之千軒

赤れとくくくくくくくくく

赤事之長松書之

赤けの台さくくくくく

大赤事好公之元お松書之

赤方又之台さくくくくく

赤くくくくくくくくく

赤くくくくくくくくく

中事之台さくくくく

赤くくくくくくくく

赤くくくくくくくく

赤くくくくくくくく

赤くくくくくくくく

赤くくくくくくくく

赤事之台さくくく

赤くくくくくくくく

赤くくくくくくくく

赤くくくくくくくく

赤事之台さくく

赤

三つ如しと云ふ

しそ扇子を定まらばとて扱ふに六つ

三つ扇子を定まらばとて扱ふに六つ

この扇子お扱ふに六つ

右をいふと又扇子の要あり

心成し紙取威候しと

左  
右を定むに六つ  
しそ扇子を定まらばとて扱ふに六つ

右を定むに六つ

しそ扇子を定まらばとて扱ふに六つ

右を定むに六つ

しそ扇子を定まらばとて扱ふに六つ

右を定むに六つ

しそ扇子を定まらばとて扱ふに六つ

右を定むに六つ

しそ扇子を定まらばとて扱ふに六つ

うらぬはいついふていふ事  
希うくえんやう  
一折百さくわくられ  
清きありまうあまを  
こころいさしれとけき  
とそるりのし  
うらぬはいついふ事  
いほまのさくわく  
やりしあはれ  
うれまのあはれ

いふはいついふ事  
うらぬはいついふ事  
あはれあはれあはれ  
うらぬはいついふ事  
けしあはれあはれ  
うらぬはいついふ事  
あはれあはれあはれ  
うらぬはいついふ事  
あはれあはれあはれ  
うらぬはいついふ事  
あはれあはれあはれ  
うらぬはいついふ事  
あはれあはれあはれ  
うらぬはいついふ事  
あはれあはれあはれ

山崎公一 入るるのふり  
うし けいせいの  
そし ちかき ちかき  
いそ ちかき ちかき  
待て ちかき ちかき  
いそ ちかき ちかき  
うし ちかき ちかき  
うし ちかき ちかき  
うし ちかき ちかき

夕 雲のり ちかき ちかき

あか ちかき ちかき  
いそ ちかき ちかき  
うし ちかき ちかき

歳乃 くれの あれ ちかき  
いそ ちかき ちかき

あか ちかき ちかき  
うし ちかき ちかき  
いそ ちかき ちかき  
うし ちかき ちかき

そこのまじりにいふく  
中うめい  
ちかちかちかちか

ちかちかちかちか

ちかちかちかちか

ちかちかちかちか

ちかちかちかちか

ちかちかちかちか

ちかちかちかちか

ちかちかちかちか

おんむいともいふく

ちかちかちかちか

ちかちかちかちか

ちかちかちかちか

ちかちかちかちか

ちかちかちかちか

ちかちかちかちか

おきつゝかきつゝ  
あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

あふきつゝ

Handwritten Japanese text in cursive style, consisting of several vertical lines of characters.

夕  
Handwritten Japanese text in cursive style, consisting of several vertical lines of characters.

Handwritten Japanese text in cursive style, consisting of several vertical lines of characters. The text is dense and includes various characters and symbols.





夕 お茶のく

お茶のく

長きん

早うい

のう後後流しゆのていさ

こほり

口うましとらりし夢のうま

久し

まそし中水くちを流しゆ

ふりしはくく作れ

けろ

入りしそとく浦のうま

あやめ水くちを流しゆ

あ

しゆしゆしゆしゆしゆしゆ

そしゆ後後とてちちち

かし事しゆしゆしゆしゆしゆ

一折をくちを流しゆ

二三のうらららららららら

流しゆしゆしゆしゆしゆ

かろしゆしゆしゆしゆしゆ

しゆしゆしゆしゆしゆ

うらららららららららら

流しゆしゆしゆしゆしゆ

かろしゆしゆしゆしゆしゆ

しゆしゆしゆしゆしゆ

流しゆしゆしゆしゆしゆ

そくまふ乃うしんてん  
いふことばはしるふも  
あふれりしるふも  
さうまふも  
さうまふも  
さうまふも  
さうまふも  
さうまふも  
さうまふも  
さうまふも

善光寺如来儀御具足子細  
在る大佛殿遷座事記  
御製作爲は恒甲斐國大佛殿と  
次中一人五百人傳馬或百世之宛  
下付法事

一甲州より後河原迄  
一後河原より遠江迄

浅野深草  
中村成徳少輔

一後河原より浪去近

山内對馬守  
有馬玄蕃次  
松下右衛門尉

一浪去より古田迄

堀尾帯刀

一古田より尾崎迄

羽柴古田備後

一尾崎より堺田清次迄

田中玄助左衛門

一堺田より丹波海まで

福清左衛門尉

船別四宮市場迄舟一乗

一堺田より陸路まで

日人

今迄の事名を

一舟名目より龜山迄

氏家内膳正

小伊勢守松平元公氏家内膳正松平徳之進守

一龜山より江州七山迄

松平下野守  
羽柴下総守

一七山より石籠迄

長束大膳左衛門

一石籠より津波迄

江戸内大臣殿

一津波より大津迄

新庄左衛門  
羽柴中務少輔

粟本郡之義人方  
乃安人中端之送身

大津より大佛殿迄  
大津宰相

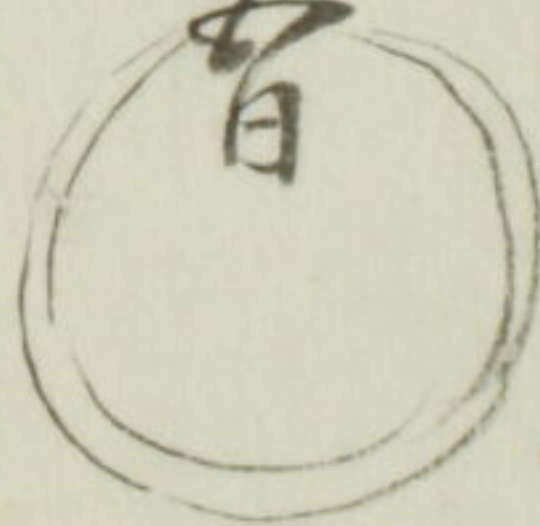
心之

右之通淺形之浮心少弼一左若若身日限在  
極相待人足信馬不扣滞押付て送身

也

秀友公所存不

安長武平六月十日



乃心奉言上作

山城國紀原郡内上弓町中告

桂姫

一 権現原 台徳院原 大蔵院原

當清代縁迄 清興代桂姫之由唯今山玉白

清台例先以家筋力之台後長根年八幡宮

清袋原小神交々々々清家之由相傳り

別其神子原女之由事之由是是英國之由

切志之由是是之由出度清席陣之由成之由例

家康様清用為成身之河國也台例は礼  
小私母為之存事

一 家康様大坂清出陳別社母清出也台例  
三條清城之守主夫人坂下之尾清保  
清保保ちりみ原より号保別陳女師成社  
松ては陳小倉清入は成身社母元之信を  
仕陳小倉小倉其の台例は信成身社上迄有陳  
中勝子之成二條清保成身社別二條中  
城も清保は礼上りては清保は成身社

下真加玉後經有は台存事

一 清台例は礼は桂保上りては保身之成身社  
経保大納言保身存事は台例は又之年之成身社  
例は礼上りては清保は成身社下迄有は台  
存事は保身之成身社

一 右通之清成保由清成保清成保家相  
傳り目出度清台例は台存事は清保は  
右保身之成身社清成保清時は清保身之  
初清保身全根は台存事は清保は外は台

金帳洋館仕成けの叙又私記に田畑と云ふ又  
松石寺所持の儀式も漢書と似合小徳の只今の  
清台例と云ふ年又一度の礼を云ふの旨に對し  
毎西其版全復の儀に事

一 只今右通由緒と云ふ清所記と云ふ必心から補  
俾方も存の云近年田畑清年貢取多能  
朱迷惑仕所持の田畑と云ふ地は家水代賣  
よ何とも丁仕儀高元親義仕の存は必清所記  
り云事

一 桂姫の如く船に在りて突石瓦の物と云ふ  
別持持方と云ふ人持持方の者桂姫も此在成  
と相意の持持方と云ふ清の白田台例の礼と云  
替りの事

一 天下極台例の礼と替り桂姫の右の由緒と  
以私を人持と云ふ言はれは心高地遠南は因ふ  
六人持持洋館仕成けの儀に上り別持馬とも洋  
願仕は其國之の持持方洋館仕成けの儀に  
上り色り儀合も其の何處志らんやう言は續

之乃在歲祀義... 子好之... 清台例相替... 悲之... 身持方... 有示... 以上

己改國姓... 以上

寬文十年

柱姫

伊老中極

右通沙... 行... 貴... 以上

又去後... 子... 領... 以上

去後... 子... 以上



尸名...成り...種あり...存る...

ひつら姫

宝永五年九月十日

國史 中津治彦信

津奉行所縁

改私云い...年...右...字...配...海...色...  
白井氏...  
①公の位...見...小...江...もの也

右...書...紙...今...の...綴...印...者...也

安永五申二月九日

祐...孫...子

俳諧乃連...師人...中...層...之...志...  
齋...集...小...云...桂...女...  
河...都...  
代...友...也...  
稱...と...  
神...功...皇...后...  
位...  
今...日...  
桂...女...  
系...嗣...と...傳...ふ...也

男とら地家とて迎へ子孫お續ら下桂村諸  
役務り者もとん祖桂女乃姉妹分流のり也  
若桂女系嗣續の女子たるはけらと下桂村乃  
分流の女乃女子相續らる也と系外も桂女乃  
流家物ともあり是之桂女男子と生産して  
そ家督とす次とわ女子と以て家督と以  
然してそ女家傳ら物ふ時庶代支所ふと  
とそ若系礼とて元系流代ももそ礼も系  
とそ時流代下知も是も國系も下向

將軍家小湯見一湯田時腹白根土系下出ら女  
系津連枝の方小系と系湯とと也  
禁裡ふもとあう是親も女傳家小系とあう是  
是元系流代の下知もはとも也此之例なる桂  
女系流代小系とあうは子とも是もお初は桂女の妻  
麻と下と云一玄國小系とら系乃流根の  
お下度妻の際も初として申番小向ひは今桂  
女系と流根のりては福有り系桂女お之の林  
夏日んころ候とまも小礼と何やらん様座の

惟子小はけ希く〜あつてまてゐるがらも  
とけ来りてまゐり更小は腹小のりといふ  
と兼相乃出之也桂女は平賀代の同家小く  
持を朱の授箱のりといひけりといふ中ま  
包物を取出し〜といふ事なりといふ  
〜といふ玄関山むらりといふ者兼内  
く殿中。入ふ〜といふ桂女系入〜後玄関  
によりて是らといふ者兼内といふ事なり  
桂女は〜といふ事なりといふ神代皇孫の

清腹希く〜也豫倉以往〜後足利家の  
時分〜といふ事跡見ゆ〜を居大岡  
文禄元年羽鮮征伐〜進發の時之御見  
清香宮小は信〜か院〜後日發示出陳  
乃御桂女は信の事〜大岡の行陣よ  
近は〜英國紙代の首途征伐〜神代皇孫  
乃御例と遊て持物〜といふ事なり  
夜後金瓶小は湯〜也國東津治世の日代  
系向〜也河野毗通云徳川初代は寛延

四年二月中桂女身の出之と祖母桂女  
將軍女より五郎の〜して玉子葵の紋乃  
右〜うら〜と志〜常行小と緋紗後  
〜んもか洗流〜まら山被髪と下髪小〜  
かん〜ら〜にひ〜と用を〜ら〜る  
白〜身〜〜や〜に〜感作と朱の例よ  
志度の時包好と玉女房小對面して云是ハ  
沖功皇后の口取帯して清〜〜〜はこし  
内鹿磨ら〜ら〜まらまら〜ひ〜は〜

彼女清子そらよ〜と〜〜〜の程  
〜年〜斗〜す〜ふ〜言〜〜や〜〜と〜  
色乃その〜ん〜〜〜刑部殿と白法殿  
小文房殿より同武枝おやと敏子と助敏あ人  
〜〜〜同〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜

一 貞丈云前より家より一紙書ふはつと娘と  
申さるりとも者ありあかやけの書ふはつと  
桂姫と申さるりとも是正に称号ありと  
志の之志の書るるよの桂女とつりかつと  
之れと略してつとつとつとつとつとつと  
け桂姫の事日先代乃神功皇后記ふも古事  
記ふもつとつとつとつとつとつとつとつと  
倉の口所は桂姫の事と申さるりとも古事  
記ふもつとつとつとつとつとつとつとつと

名桂女の花らんくはらもりの沖切里の  
少くは帝を侍侍と云桂女は河の  
とまら桂の里より出ふ桂女らんを  
留山元云其方は清慈よまを舞ひ  
てをりておける桂乃桂女の装束と  
て若君茂桂山徳星々の桂女中入あり  
まら桂乃男乃風信おねは鼓装束を  
累ふ入ま留心ま代の長刀と竹筒ふ  
云歌陳乃あともあつけ歌の方よ桂女

をらん初とまら人あまはとらうねくまを  
あしあか云くは方と云ら義治は若君  
そ留心政長は子清見九十九歳やあま  
の政長のあは本師在まの留心赤松一色  
名号ふは是寺の城を責らま落城の  
清見丸と城介あはあまの事と  
又永祿四年六月海軍義治は好飛あま  
身あは桂あま清縁は後作程  
ま云く又年中恒例元月五日あま地

子百系い津岐下と御ふし津岐下と子百と

日野殿柱也云柱殿中(系之地)菟音ら女の名(日野)殿

又云後(統云)後系(の)礼の車馬と(の)付ら(番の)

礼也(の)ら(礼)時(を)何(の)礼(を)多(く)一人(も)も(後)

樂(も)も(く)白(柏)子(柱)子(ら)何(を)後(系)も(何)の

たり(又)云(わ)つ(く)よ(い)門(送)り(ま)ね(く)白(柏)子(お)ら

解(り)礼(を)も(く)さ(い)さ(い)ま(進)り(ま)く(傾)城(も)ら(少)

産(を)之(辰)山(と)礼(を)云(く)右(小)法(を)何(を)も

柱(女)の(ま)ふ(く)今(乃)柱(姫)の(ま)ふ(い)あ(く)も(と)

又藏人(齊)合(の)柱(川)礼(鮎)と(貴)る(女)の(形)と(縁)り

さ(そ)柱(の)女(を)書(く)あ(り)ま(を)神(よ)春(風)か(り)

ま(を)柱(を)挿(を)い(く)さ(そ)ま(を)も(く)も(は)い(く)

い(と)か(る)形(を)何(り)つ(つ)田(ら)も(鮎)也(ら)い(は)ん

あ(ゆ)と(挿)ふ(入)く(う)る(女)之(を)柱(の)女(を)も(す)

と(入)く(い)ふ(之)是(ら)又(柱)女(の)柱(女)の(列)之(今)世(の)

柱(姫)と(ふ)その(真)代(め)い(は)く(く)も(新)名(以)来

世(ふ)ま(く)神(切)是(后)の(津)岐(帝)の(と)ま(ま)て(後)

か(家)山(の)く(納)く(子)四(百)余(年)

皇(后)御(没)の(年)より  
文(徳)之(年)迄(之)

と盡く事の時ふりしに事なきに思ふ

丙申二月廿五日

任事不藏貞丈記

右桂女存に依て乞求に依りて貞丈記  
い書字に年

一時安永又丙申年四月初旬

多賀中原常政誌

五心奉之上作

山城國純伊郡日土町時村貞兵衛 桂姫

一 権現様 台徳院様 大猷院様

當津代様と 清定代桂姫も此今山玉高所

台例の礼と祈家助の事後を根付八幡文

の清盛様と神文ももろの文が相傳りあり

別け神文様女文の事事小口元丸は英國と云

切ふりし後なる目出度清定陳世の成しを例と

家康様は用ひたる成り并に河の國清台例に





田畑より又石斗取持儀式より清世と俗合  
儀より只今清古例と云ふに一度の先礼云々  
の別あり毎口其腹全儀を願はす事

一 只今右の儀緒より清所より後世より  
と存は云近辛田畑清年貢の先多儀成儀  
此所持より田畑より他家承代者より何れ  
此儀云  
此先禮儀は清所より事

一 桂姫より義助の先名流清抱云々  
別儀持方と儀五人儀持方は是の桂姫より

或は由意より持持方と儀緒より持持方頂戴  
古例より先古初より事

一 天正原古例より先古初桂姫より右の儀緒より  
此儀五人儀緒より先古初儀緒より通儀  
人持持方儀緒より京都より別口馬と云清儀  
清云國之儀持持方と清儀より先古初より通  
儀より先古初儀緒より清儀緒より儀緒  
清儀緒より儀緒より儀緒より儀緒より儀緒

口恙悲多の 加清台例の相習由初の國元之序  
扶持方淨願はるゝ趣の亦丁寧存心也

心國純信の上等時付

寛文十年戊子月

桂姫

清氣中塚

右通口塚塚の原上と藤と清當所也  
清氣の塚也子初頂戴仕列の味及九廣塚の桂子  
九貴同存原仕る事

又之後七年山歌の上をいもり南東也 口字の塚の  
子初頂戴仕列の塚に雲の塚ら根子と貴同清氣  
仕る事！之後の礼小丘下は後進門仕る也と親姫  
承之御身は成申後と書候に云又死に仕被氣とい  
今と進門仕る候に云也事の塚の歌言仕度継國  
凡右初の根字の成下りゝ趣有丁寧存心也

寛永九年壬子九月十日

同夫

かつ姫

中澤清太郎

清里行帳

右之記後あり候より上奉行の事書し置也

城別往候為上等村柱姫の家助の後之記を  
性音

神功皇后之御家系流の家助の後之記を  
多村小住指止る必要

清里代々の台例の記より上之記を務め候

東照宮承之河 清里國より初に家

神功皇后之御清里退治目出度

清里陳名なる成清台例を

清之意より上之記 正之河並候奉承 傳旨於清地

清慈意より成云ふて白願物も法持より清國の  
至と頂戴は種あり真如は合と好かき奉蒙  
清惠恩の上右清左例に中緒人坂表 清出陳く  
別と八幡

お飛塚とまじり上清方 清陳女師

清出陳なる成り身 神功清首途は成り成  
今度清陳女師名を奉存清陳中奉清原  
は種有とも出家

清上意の信り上目出度 清出陳なる成り成

京の清原成と成り成り右例に成り成り  
清首途は 正清款の上別  
清代清成礼の上り成り成り清原成下通相違  
清原成と不相絶相替り成り

神功皇后清帽子奉称 神祕具

右清帽子とまじり成り成り成り成り

神祕ら別と首と奉存

東照宮原と成り成り成り成り成り成り  
清出陳 成り成り成り成り 清陳中の信り成り成り

先祖と頂之は後 清代は右清帽子持事は左  
清目見は左不介娘之は左佳例は左車

右清帽子は後

清代は持事は娘之は清後と右は已後  
上之極清頂戴多の成持

若君原 姫君原 清初稚清原の歌

清初は左頂戴多の成持は左  
清初は左依之移之号は左細定は左

以事

一 桂娘は清表清礼の上は清持事と右は清

江戸

清初は平川は清屋所は清補と桂娘は清

加さ入是より奥清中は清田は左

若君原 姫君原 清初は左

清台例は上は左執上は清と左は左は左

清初は左 台徳院は清代は左

當清代は左は左は左

清首途は左は左は左は左は左は左

公方係 敏之右 弟之右 弟之右  
 大納言 敏之右 弟之右 弟之右  
 清盛 敏之右 弟之右 弟之右  
 若右 敏之右 弟之右 弟之右  
 姫右 敏之右 弟之右 弟之右  
 清之家 敏之右 弟之右 弟之右  
 清連 敏之右 弟之右 弟之右  
 之外 敏之右 弟之右 弟之右  
 之 敏之右 弟之右 弟之右

清盛代也 清代之清右例之右 敏之右 弟之右  
 國東 敏之右 弟之右 弟之右  
 座 敏之右 弟之右 弟之右  
 先祖 敏之右 弟之右 弟之右  
 孫 敏之右 弟之右 弟之右  
 正 敏之右 弟之右 弟之右  
 一 敏之右 弟之右 弟之右  
 尾 敏之右 弟之右 弟之右  
 清盛意 敏之右 弟之右 弟之右

一 桂姫江表。下。藤。京。都。所。奉。行。所。清。新。  
中。上。正。和。司。代。極。之。規。之。色。北。川。渡。小。之。清。境。交。  
其。法。復。馬。二。疋。之。是。院。又。常。事。玉。河。國。所。女。改。出。  
池。又。町。奉。行。取。之。法。中。之。事。

一 江表清原。之。白。系。於。在。山。之。藤。之。道。中。女。改。  
之。後。之。大。奥。正。年。多。所。方。之。額。上。之。正。年。多。所。之。正。  
苗。之。所。柳。方。之。所。乃。之。池。又。頂。戴。法。之。清。原。下。  
比。傳。馬。小。正。苗。之。所。柳。之。額。上。之。正。年。多。所。之。正。今。頂。  
戴。法。之。事。

一 江表表系。之。藤。之。京。都。町。清。境。所。取。寺。法。法。  
奉。行。所。之。所。極。之。事。至。於。江。表。出。正。苗。之。所。柳。  
之。是。之。所。清。境。之。上。之。正。方。所。取。之。法。中。之。事。

一 江表表。道。苗。之。所。柳。之。町。宅。之。法。之。之。之。法。  
作。付。道。苗。中。之。法。持。方。人。教。意。頂。戴。法。之。之。法。清。  
苗。之。所。柳。方。之。所。意。之。作。下。之。後。柳。方。之。所。法。又。  
中。春。登。之。之。之。法。持。頂。戴。法。之。之。事。

一 上。等。町。村。桂。原。表。之。之。除。地。之。法。之。法。之。之。之。組。成。  
年。之。之。之。除。地。之。法。之。之。今。上。等。町。村。之。之。事。



一 桂姫身之由意有の叔成上言如享保七年  
寅月何所法事行不河嫂其妻有仰より建永年  
屋妻此もも之貫目経る也下云 伊甘方清彦  
の法是之方言の由後継継其よりいふ言也成上言後心  
多し有法成の上何年未くといふ後法は之作法成  
上言又之後法 伊波之入時所悪妻の言は所  
之教也為之上言の自云 伊波之後年春成上言  
伊波之入上言の由桂家取持の由也其後成上言  
賣拂

清由所原方以年貢由未進上納仕只今言二系  
表節胡少礼も得相勤不中有縁方もそのり云  
在種成上言

一 桂家棟後成下 清由の名も從又後念候成上仰  
口是中も成下今有持仕今小傳成上初年

右通口成上

上言好村  
以つて姫  
日更  
申は言成上

享保十七年十月日

寛延四年

未二月桂女江後上府建統之夏

一 神功皇后之長女之助之由もて城國高野村桂屋  
當時は友小幡十兵衛の支配ありし也

中津御所

中津右門  
かゝる女

神功皇后之韓邊活之藤津甲代高野 石津綿  
帽子付之御持任也

後現存之河津法燈之藤津是左右津台例也

正統帽子殿の頂戴と云ふ右に柱女紅白の袴  
袴の中へ袴お飛し一方の儀は清陳中へ夜長  
おのし居右の一方を之祖尾造敏口母堂候も若  
清水沐藏志水お賀守宗清の長女高河尾行  
腰衣の白見方より方也

一 権規極人坂清出陳の廊柱女赤白補前も右に  
正統帽子清頂戴の冠取玉謂出給る 次は後柱女  
赤白の社あり候 清守は後へくと白の明神の  
皮清言のよき使はし高河尾戰場の福利に金銀使

清高院の斜右柱女清陳の儀は依し

公儀 清代智の廊柱女は出下

人齋院極清代智の廊下り

清目見儀も右の扶持方より領可也 作甘名の左

左のりも年々出府も仕の事をも境に越の事と名

と云辞進中と云後

叢有院極清代智より廊の扶持方清領仕御事

親の事と云後を代清九貫目事と云後

常憲院極清代智より廊柱女白目清領仕

文照院梅清代習存下り白浪卒校五條生々

本御所御代習已相知一年同京保二年存下り  
付度旧臘廿一日右桂女出府仕石町新道張若月

但滞留中存宅 清光少人持家存下り

平岡少人矣より未廣 清紋存家存下り

紅裏時後一重英全女及清紋の星出勤の女中右

平人紅糸粉柄古履也送りて右綿帽子頂戴

女止産産候又男女小児頂戴仕候に産産

候に産産候に産産

寛延四年二月

のつゝ女

申決右門

山城國紀伊郡上野村桂娘屋徳書考

一 桂娘屋徳書考

此功室屋徳書例と云々家筋は右の書例  
とら何と事なり又長春の家筋と云々  
地是は以家筋は成系當り不分明なるは  
不中か又面はたはは成は桂村の徳書例は  
はは農氏と事の家邦と古法は好は成  
心は成は成

愚按し西名例と云々は沙櫻川系

白幻

沖功皇后之韓祚儀之門出也桂川の口隈なる  
存の跡に在りて後戸の役人も有る程のたの隈に  
海の上に出陳の山見下なる 石清帽子と云  
よきもの後を存は是申長後がく近江湖水  
の落口、後戸と作人良首と云は別は所は役  
人を瀬織津比咩と云は是も極首は極姫と  
當下りて桂川の事と云は名と云は桂姫留  
來りてお見せしむるに姫と女子の事稱也今云

桂姫と媛と字は代用するも下し古例と  
後ら今も沖陳の口は隈と事と云は

但建武の藏人龜平合の事、桂女と云は  
是ら沖陳の事と云は、後女は桂川  
よして漢の船と賣販女はるも必しも混と  
合うる事と依り同小注を志也

又曰、沖陳の沖陳中、は住居の事と云は、  
と云はあり、尾陽の事と云は、西母と云は、  
沖藏志味甲斐と云は、是女と云は、別桂姫近江



後々此タル一モアリシナリは女と當入タルニ  
ノ一ナリ尚可也

寛政元年七月七日 常政誌



可眩升清道經并寺格後等胎玉禪易宋心  
東照宮原 台使院原 上意之極略記

一 東照入神君原字歲時之電二拜年忌禱之  
清溪宮原信康公清讓之別漢松城清移於在  
豐之申年名月 上意洞家之僧等胎者今  
何國居奇丁相尋旨記 作出之如珠別錄傳妙見  
亦信職仕連之上得者早速記 下出於 清和  
十年末 清和是之在後以宋等胎清也原之

之働云 仰出種有 上意有之 等胎下懸形  
入院住尔来返日清意為之 上意每度汗領物亦  
之刻今所待住任其

一 天正七年二月廿九日

東照神君御流石清在哉之御集心原有眾故小珠哉  
亦為成依之去怨恨甚深而常之蟠之 清腹敏現  
蛇形昼夜奉必

大神若故諸宗之威權有之令信信能為色之追福  
伴古之勤修坊之怨是未退乃令御不武敬備之冷

請下懸舟等胎支子子禪易宋之石連少誠住清  
謁

大神若則 清中談 上意有之 遊者之方以禪法

彼力下速降住所必怪鬼願 上意奉請之 初苗上

子 清腹敏而禪定佛法之上授其之隔也佛祖為之

菩薩戒血脉故法盛之怨是忽意解懺悔而礼射

而曰依之禪師之法力將脫眾業亦蛇身自今後更

空著恨之上天下安全永可也子孫之繁昌云午而

退去スト云之由汝法盛之怨是退伏スル所也



十七年春申別武田勝於波落後織田信長公任是  
後河由國津領合與後遠冬是別初由津水小屬也  
年癸未四月廿日浪行津城之寺信公 在右四玉  
曹洞宗之僧祿祓家 仰右寺知寺信寺  
信院云唱云不且向後下信院之祿寺信寺別  
津由寺津別也下信院寺信寺之祿寺信寺  
寺末右信祿祓津別也寺  
之河遠江後河矣  
信是國大心回國也

為信祿之上曹洞  
寺院一寺之祿寺  
仍信也

壬午年癸未年十月廿八日

家康津陶利

下信院寺信

今年近由寺寺也

一 天正十八年五月廿一日寺信遷化仕寺十九年也

し時

人神若原相乃浦京清上庫同年九月等臨幸子禪易  
清上上意之勢別藤沼物見并下時若任職也  
作有慶長二或年四月十日遷化也寺九年也

一 慶長二或月遠別若水新泉寺寺也寺格者子宋  
山 上意之任職也 作有本宋山也也

神若原清同年壬寅年也別清新入清也法成  
上意之任職也同是又長年中江也 清也四月六日  
支清所原 清也之法同也 作有本別八月上在

山来面目清国寺門願家心之為原家院破之寺  
院之遠別之法寺常別潤心寺也同大中寺也徳院  
水若新雲寺國府也総寧寺也迄古洋寺也徳院  
徳寺上別双林寺下野傑孝寺甲別廣嚴院也此  
外園別之寺院平七人列也之徳寺也平右高  
量之院祿今平持也之右院祿之内之山来面目  
小寺若宋山自説破高量之也之院也其平之  
支清所原 清也之寺也之寺也之寺也之寺也  
油法之ありと云々

法同年々青桐百貫文被也宋心給之後是  
宋心長乞曹洞宗後天禪之津原此津原之後  
慶長十八年村江後別津城隱居也  
津原多之と遠別粟倉村金生寺津領方原持持  
津原法津原武指不蔵種有津原法  
每年正月日後府津城法同 伊右法同別  
祿委當所秘院法同別不遠別云法と部と  
法同信侶年々一人金光寺長乞金池院長乞  
津原法同相了而彼也之原根子之津城給宋心

慶長十九年二月廿日後府津城宋心在 系法同也  
伊右別者推花信道結意明宗頌曰

二月推花所之新 雲一見更之親  
相違之道体宿去 林下竹為見一人

法同金生寺宋心と為師友後彼者津原信光  
津原寺瑞龍寺廣徳寺安養寺大林寺也宋心曰  
烟燉咲推花色 必合萬歳之色  
林下一人不見 天下安全台車

法同坂 津原陣幕と津原外蔵院と津原

宋心淨教 淨教為形平日淨內佛檀之元是  
 言教者為檀也後宋心在領全生寺之至疾  
 曹洞宗法同商量之丁為同祖家 作也  
 是也宋心 淨教法同緣之也依之今  
 日本國中江湖文別法教之師行之寺院之商所  
 家學者有掛病之中之別法教之也後有德  
 涉在石法教淨教之今度持法法外淨布施被  
 也宋淨領教之涉在也  
 一 同教之長九宋人攻淨出陳之師中泉於 口教等

悟禪易宋淨身使松在德之美心德也 作也多志  
 之友長乞也下給宋夜之禪師之德也固志下德也  
 現任宋心禪師在禮謝淨請也也也則等悟法風心  
 化禪禪師之給禪易也復天一株禪師也也  
 人神君之也思在也德也進給宋宗門之也也淨也  
 志成後今度之也僧位解之也宋夜也持宋法也  
 一 宋心天下曹洞宗法行淨條目 淨宋不慶長十七  
 年壬子五月廿日發府於淨城頂戴也也  
 天下曹洞宗法度

- 一 不在字年修成乾之入之法幢之夏
- 一 不在二十年修成乾之入之法幢之夏
- 一 寺中遺放之惠法其於諸心許密之夏
- 一 校江湖既下經之年將夜夏其修成未熟之信

將夜事

一 為未心肖印寺旋事

右條之志以首心下寺中遺放者也

宋長七年二月廿八日 清來平

大洞院

今也這百軍二年也

右清來平為教法孫礼所盟又二丁脛并支配下大  
 欣大洞院之寺院有方寺請給祿寺大洞院也  
 寺号有自具達

上洞清公張 寺上之大洞院元与宋心張 威下清院  
 住心是清慈号之淺教之曹洞矣之禪之清佛能去  
 而所實之礼有之善薩戒血脉 清佛授上之級名  
 丁脛并室中之口寺又之切紙佛授之威從職之令事好  
 在在清夏 清身之上心 清佛授下之令右宋



山寛氷十二亥年九月廿日遷化丁脛亦在寺十六  
年也今在寺在寺二十二年也世壽九十四存  
一之和年三月廿日曹洞宗法度 清定中十代也兼

江戶 清成頂戴

台徳院 清定中

後書あり通

之和年三月廿日

清定中

人洞院

今年迄百年八年也

右采心 清定中頂戴住持年東海道助十二國  
相觸の觸今當林之之車

一 可脛亦在代雲途澄松二端坊大右村社業無編之序

右清洲原 清定中云途延運 清定中

作曾の師清定住持之室今在清定教書也

和連書之字

今度丁脛亦二端坊社業出入也

右清洲原 上同也

相國原住永祿十二年清洲城之名丁脛亦

延運元 仰曾社稷寺法儀方夏之播也  
任持時多上之極社稷心原中可多海  
心之廣之

又月海

清田彈心忠  
仰丹播方馬  
板倉内格心  
松平右邊門作  
井上之計心  
板倉内坊心

古井大坊心  
酒井雅樂心

高家全之清反

右之寛永兩又月海日也今也百年二年之禮之角  
右之村之之播働之清心属之依而 清心系之清  
列如字

遠別大板社稷寺之事

右之當職之法勤進寺務未出前之令取字年

傳以判刑之履之有在憲門射任絕德出至上品  
夏永不可相遠者也仍此併

永祿十二年

八月七日

家康 清國判

社業寺別當之播

雲岩寺付新泉寺飯米之清願 清國寺之宗

雲岩寺今有改号新泉寺在江國志國郡  
古佐江之内午之石或寺或外依之規所云  
附也若山林竹木寺中向有法後合身許院

志佛東勤行修造不可有懈怠此併

享長九年九月廿日 橋邊家 清國寺

宗山

一 任職清國寺書之夏

可懸竹十代等格十二代禪易十二代末山志

二 僧志

神君原 清國寺 上志 任職家

作十代惠兼十五代雲達十六代存康志

二僧志

台德院極 清惠 上意 任職 止也

代秀 天存 康遷 化後 任依 寺 德和 宗 存

會 故 下 德 國 押 所 祥 雲 寺 秀 天 可 體 任 任

職 天 任 任 可 秀 寺 可 秀 天 任 任 任 任

右 集 書 藏 下 可 秀 天 任 職 任 任

任 任 任 任 任 任 任 任 任 任

以上

可 體 任 任 任 任 任 任 任 任 任 任

上 可 體 任 任 任 任 任 任 任 任 任 任

寬 永 十 五 年 二 月 二 日 松 平 任 任 任 任

任 任 任 任 任 任 任 任 任 任

任 任 任 任 任 任 任 任 任 任

任 任 任 任 任 任 任 任 任 任

全 生 寺

大 藏 院 極 清 代 今 五 年 迄 百 二 十 四 年

一 可 體 任 任 任 任 任 任 任 任 任 任

退多事信子以願上日多思淨河成於新信云  
小事之難重に多事之成と書出武と信信云  
并後序業

淨神意と云創淨信

一不勝亦二十代成育万治四年信祿國

淨市知狀文云

冬河 冬河 後河

は今國曹洞宗并

信長國修禪寺

門流此亦之了也

僧祿之る不也

信出也其未通不也

由法名之仍也

万治四年昔

其法寺下

其後寺下

信長寺下

雅樂氏下

不勝亦

今世年迄九十七年也

定

一 法宗法武不可相亂若不行法武則法宗有之不能為法  
及沙法事

一 不存宗之法武傍信不可有寺院住持更

附新義不可故弄權之法事

一 寺之規式不可亂縱雖為寺對未寺不可有  
擬不處之沙法事

一 檀越之米能為何寺之任之公後傍信方不可相爭  
事

一 結徒黨企圖謀利似合未業不可任更

一 肖國法武則本之節疏有之而公實受之違事

一 寺院佛圖被毀討不可及負業事

附佛圖全解急掃除不可爭事

一 寺願一切不可賣買之不可入爭候也事

一 寺中僧者所有弟子之定根不可出家若得子細  
疏有之則如之故之徒受其不可任之意更

右之條之法宗在寺中與世外之別條教法不可  
不相肖之疏遠托名隨得之權重不可任之任裁下

知者也

寺院下知狀

- 一 仿俗之衣新慈之分際丁志之佛更作名之優
- 式禮那能定亦慈性丁住來
- 一 檀方建之建緒有之寺院任職之優名有之是耶
- 斗之條之印寺之相後丁住之意來
- 一 以金取之寺後後任之契來
- 一 借其家梅仏檀丁下求利用來
- 一 他人之勿海親好能有之寺所舍女人不抱至

但有來妻常寺可為名別本

右之條之丁寺之有於遠志隨科之性也丁有  
由沙法之任任執達也件

竟文文元年七月十日

大初寫

其後也

其後也  
新樂民

今是年延九十二年

定

一 嗣法丁畢也僧院經其六年之瞬而有時夜至志

承平清修自之各以嗣法原之推奉此丁被之山  
若嗣法原有放後之或古寺或仿保之味可  
為法也

一 原資面授一所寺院者為道之禪師之家訓自今  
以後行寺院雖令移後之而傳之也今亦常  
一 原資相乘之外他人所法信止事

一 僧法之房入院之師之古寺院之嗣書除之血脈大  
來亦多授之福轉之而寺所屬之寺院當從令遷祀  
之寺之德和又之於古寺因門下授受之更

右傳之承平寺統持寺枕於古 作也之向後之承  
仿信也之古寺古有若於遠祀之寺有之寺為也事  
者也

之保十二年換八日 下 彈心判

阿 飛彈判

永 仔笑判

丁 眩秋

今七年送五年

今度古寺 清石藏書 作佛書有之矣



東書在紙乃其後之意支那下在觸行也其母  
自其來七月申延也寺一通亮丁其紙

一 亦保國之身二條之師資相乘之外以他人消法信止  
在 師出之師資面授之外他之五派之消法信止  
未消信止之復也

一 才之弟也月移時初之消屬之復信也  
師出也他之信者之復信也由寺之相復復信  
相定之寺寺之血脉大車消相復跡世障之並  
張越之若之有之因又寬文年中春也

即條目之自檀方建之由緒有之寺院後復信  
他之仁有り存方之復信也寺之相法復不寺直  
明月法也卷下也

一 宣物之二物信授之復或大寺或名師之下之稱稱  
之二物信授之事也其不可用事

有條之消法信止之有之存方之消法信止之  
念在紙也以上

赤八月十二日

信持寺 下

永平寺 下

下臨亦

先伯大永以曆法永平法武混化任以自承  
平古規與後之新額上古法之新規狀

曹洞宗祖道之一家訓書一知唯僧一制其法規

之一何多年悲不協祖意由是募財於下寺院新

持僧堂之法書欲一道之一法規與後古風者感

志在老中雖就向來亦必發戒下寺院勵精

矣修一動不一有怠惰一條祿務一知指揮也仍

也件

元文二年戊午八月

大 敏前書

忠相 刊

松 紀伊書

信今日

枚 敏中書

貞俱日

可眩亦

諸宗寺院未論或禪或淨階法原一世牌等

其外宗之法一掛一以一事一新一法一于一錄一所一編一次

不寺亦一為一遊一一一子一吟一味一依一怙一具一負一之一一一人一裁一許一事

以一月一付一之一被一遠一宵一不一知一法一之一智一之一付一以一之一之一及

及雜一以一者一八一奉一行一而一之一危一也一以一之一之一息一及一下

戸付の他宗又々俗人掛りの出令只今とて通添  
管の了る旨

右通法宗一統了る旨

十月

右記

東照大権現様

白徳院様

伊集平清條目

所定書并可懸永清申端書被府改事詔家

中ノ段抄被書了る旨

宝曆七丁丑年九月

下懸齋

守賢

寺社

所奉行所

已書成河條目

條目

- 一 大坂てんがらう尾崎山城川伏分り上右佐也  
書証云用とて未中一得文或同致  
云河運上事
- 一 云成河用云事私事者有河通証取  
抄任可也事
- 一 奉云人し舟も運使不之形に但高賣物  
於積云雲可取改抄本於積本云云人  
云云及之肉也云云上之抄本云云也乃云事

一 貳拾石舟、運使渡子又費目宛可取、私  
大小流立、運使之在、貳拾石舟、懸、  
可取、事、

一 運者、運使在、同前、事、

一 くあり、私、上、本、貳、り、私、下、言、事、

一 新、運、書、干、事、人、懸、渡、宛、の、世、言、事、

右、条、之、以、定、運、使、在、私、持、對、為、人、非  
分、於、中、懸、之、以、加、所、成、故、也、

延寶八年十月二日

河村宗太

河村宗太

河村宗太  
包書中

大坂傳法尼勝山城門伏見下、包書  
私事、但、去、延、寶、八、年、十、月、二、日、河、村、宗、太  
之、自、以、不、有、相、違、也、

延寶七年二月廿日

右、傳、法、尼、勝、山、城、門、伏、見、下、包、書

河村右馬  
本村宗右馬  
乙書中

河村文之旨

一 乙書取来之事  
右右石舟符の根子といふ宛に相宜と為友  
人の信状し并船取友人決り救多下付也  
一 返状下り取家人所持と来と申覺  
親為友人信状し舟取回す舟符下  
為たあり也

一 抄本新造と云ふ事一と云ふ事  
如左と云運と云友人下付也  
右下り取与い旨と状也

之和武年十月日

附与書判  
大炊助判  
佐渡与判  
伊左与判

本村宗右馬  
角倉与一及

寛永二年正月天道弘則氏

一 天道弘則氏 武百又拾九艘

木村宗左衛門角倉与下弘則氏 遣百

六拾或人 前拾人 舟拾六艘 死別紙

内

一 七拾八艘

京得拾九人

一 六拾四艘

淀組拾五人

一 武拾三艘

鳥羽拾二人

一 三拾武艘

中武拾人

一 武拾七艘

越拾七人

一 武拾武艘

大坂拾五人

一 拾口艘

尾九人

一 武百又拾八艘

殘三艘 名目是也

弘則氏子 末津増江 舟付所定也

所定也

右弘則氏子 末津増江 寛永三年 弘則

有 弘則氏 舟付所定也 今度 弘則

味 弘則氏 舟付所定也 今度 弘則

相りしりて書き、若し有る事方下付は  
去る東年中、七、作、出、進、上、本、内、高  
二儀、運、上、浪、不、勿、海、本、村、宗、大、馬、自、倉  
与、一、并、上、中、一、為、配、分、以、今、致、増、七  
作、付、以、之、八、取、方、之、者、有、も、催、来、之、若、對  
定、之、亦、運、使、出、不、之、増、九、月、初、也、  
と、い、く、取、以、水、之、切、り、上、切、付、取、  
以、上、中、の、不、及、り、と、取、以、水、之、不、と、此  
宜、之、之、執、為、浪、之、急、方、之、取、也、向、後、遠  
省、之、族、之、下、之、事、を、教、科、也、也

寛保九年九月

松平日向書下  
鈴木茂輝書下  
小笠原茂輝書下  
河津忠実書下  
稀生中津書下  
久松大和書下  
筑前廣吉書下  
約本根北後書下  
伴旗書下  
た近書下





残り配分後 所定額より五年以上前と  
し海産物納付額より中一と云ふ所  
入用 株持配分額と積りたる上米限  
り所増額を以て黒田町と極海産物  
と株持を以て云ふ所 所定額入用 所定額は  
亦所定額を以て云ふ所 所定額は上米限  
永三年より所定額は所定額に増し  
所定額は所定額以上米限 所定額は  
所定額より云ふ所 所定額は所定額  
十分の一 所定額は所定額より十分の一

過去年度所定額より右中と極海産物納付十分  
の内 所定額より所定額より十分の一  
所定額より所定額より十分の一 所定額より十分の一  
過去年度所定額より所定額より十分の一 所定額より十分の一  
所定額より所定額より十分の一 所定額より十分の一  
所定額より所定額より十分の一 所定額より十分の一  
所定額より所定額より十分の一 所定額より十分の一  
所定額より所定額より十分の一 所定額より十分の一

享保九年 辰十月 過去年度所定額

甲賀合本堂  
溝口市下

浦十太馬下  
字野久太馬下  
大津新太馬下  
酒色一伊助下  
云并九太馬下  
井川太馬下

本村宗右馬下

角書与力振

教書 經之永知相遠有之官者其也

木 宗右馬下  
角 与一 下

本村宗右馬下 申緒書

申緒書

高武白石

本村宗右馬

古徳院様御朱下 元和三年 法門 瑞 系  
重以

一 先祖本下孫次郎勝重後天正年中以後  
本下とを三息仕本村と改以後宗右馬与名  
改仕以て書と文配 後三河村与之郎後与  
三右馬与名改仕宗右馬 又人高与文配仕以  
其代仕古 後取知不中以大岡秀吉也

一 四時良きとき船出用ゝ方く 河津下と為  
之 行付は右河津来下と今結り四時良

一 昔々長年中

権現様伏見と云拖 河津天下と河津務は花  
四取約の四時宗右衛門勝心伏見と直電任折く  
四御もより大坂又寄約と河津人へ後有く  
昔々と云取右河津殿にお勤無上右河津裡  
献仕仕

権現様河津刺し河書宗右衛門勝心の宗直  
只今と云持仕無上

一 昔々長年中 秋舎津上板系勝乃運活関  
東はと云拖 河津河津と云と伏見と  
河津と大坂方分取北戸中と刻長東大藏  
お捕分下知有くは取右と右衛門勝心伏見四  
城寄子と申はお初と云おの候は右大坂  
后尾取は川と云と權現様より不申申と云  
以

権現様大坂河津丸と云と花 以右仕は四女中  
五三人半作理肥後守と仁田取と云と人  
宗右衛門勝心と云と取と云と右と云と伏見河津

高橋村死出中女中、内、あらし及  
く、方後、と、宗右衛門、通、有、の、首

口傳書

一、圓、今、東、の、所、合、我、之、為、江、河、勝、利、

権、現、様、天、下、所、統、一、所、代、白、之、為、成、言、也、

書、後、石、口、移、り、書、有、以、之、仕、名、也、

作、付、書、又、七、八、年、

権、現、様、所、奉、下、書、七、十、七、年、

白、徳、院、様、所、奉、下、書、下、書、三、三、書、後、

病、死、仕、之、後、書、又、死、也、  
石、口、移、り、書、

十、年、宗、右、衛、門、吉、人、の、お、勅、所、以、傳、信、

一、卷、長、十、七、年、大、阪、陣、の、高、板、倉、伊、賀、書、

殿、宗、右、衛、門、下、書、信、書、の、後、小、橋、白、本、書、冊、

と、西、入、敷、人、と、か、し、誰、来、し、侍、お、改、名、

有、り、付、口、書、品、の、お、小、橋、白、敷、人、の、お、書、

而、上、下、十、人、余、取、中、の、お、我、符、白、人、お、書、

此、江、上、橋、原、在、也、の、お、書、白、板、倉、伊、賀、書、

殿、白、内、用、の、後、書、付、口、通、書、の、書、付、白、人、

古、取、武、士、方、の、後、書、宗、右、衛、門、の、お、書、通、下、口、

口、書、如、口、書、用、の、後、書、別、移、り、の、後、書、

押司法通少統子來也人今戶少少伊族會啟  
四原高之由波以知戶分能取少付宗家為  
勝心因伴孫次郎勝清人教下連馬之由連  
八播境之池忘少統之法用之通少少少  
乃以知否後も不源左馬門進一討意  
之在防池之突面首之由源左馬門進少統  
悉討以伊族會啟方之源左馬門首為持方之  
執之進少知河波府之由源左之由少統  
指現様手之甲波府之由源左之由少統  
河城之由進 上源左馬門首之由源左 上源左

陣之由首途之由源左 河城之由源左之由源左  
河城之由源左之由源左 河城之由源左之由源左  
河城之由源左之由源左 河城之由源左之由源左

右源左馬門親之由源左之由源左之由源左  
初少補方之由源左之由源左之由源左  
河城之由源左之由源左之由源左  
伊族會啟之由源左之由源左之由源左  
河城之由源左之由源左之由源左  
河城之由源左之由源左之由源左  
河城之由源左之由源左之由源左  
河城之由源左之由源左之由源左

齊

一 元和元年大坂御陣 所方白く言ふ事  
越々花捲 所通言ふ本津川船 舟橋敷  
一 百名宗太忠 下名 信付早業 宗太忠 同  
將孫次郎 本津 在哉 舟橋と掛す 信依  
指腹様 所儀 中其外 所軍勢 之 所 是 捲 通  
以七言宗太忠 所例 是 是 方 難 有 奉  
象 上言云

右之言宗太忠 眼病 言 在 所  
所 辱 是 為 奉 所 自 所 目 業 奉

宗太忠 是 難 有 言 所 信 傳 並 以 舟  
橋 所 用 舟 付 舟 舟 渡 一 口 吐 師 本 津 松 袋  
並 重 瓶 亦 七 言 是 之 上 所 舟 舟 是 難 有

一 同所陣 言 所 城 川 船 行 内 所 境 大 坂 方  
舟 數 者 切 放 水 坂 所 流 之 行 別 茨 田 郡 大 庭  
庄 山 上 庄 八 言 庄 十 七 言 庄 揚 別 名 郡 板 並 庄  
大 分 水 之 信 村 之 及 洪 舟 所 陣 亦 信 通  
諸 事 舟 所 不 自 申 是 成 一 旦 行 相 市 心 也  
水 而 之 信 付 舟 所 不 舟 舟 宗 太 忠  
門 水 而 之 信 付 舟 所 將 孫 次 郎 舟 連

右切所へ張紙所持仕以丹、其亦也書丹  
數千艘系沈水と防去儀竹木と以藥面  
其子大和川へ堤切の付以港水川為り  
依り清考り自陣前へ河道通出自由  
相感也

右水前河川口付以丹一切也書丹此の  
お勤也書株持在張紙お勤也

一寅卯寅年大坂河陣中二系江

河城中法馬河決炮出軍用、河道其  
外法國分、以去糧米楠竹抱把法材未運

道へ後宗右衛門、此は河付吏、下江法用

無事お勤也

右河川用交也書丹お勤也余も此一果  
津川船七ヶ所へ上河船を以川船有合  
以互へ小舟も下知仕法用お勤也

せり

一卯五月八日大坂河陣利上

権現様お槍、河上京以江河道中へ俄風毎  
法法供元中陣介難儀法以知宗右衛門  
兩具未定お勤也其音浪古城へ有書お勤也



即指此為之口者有之如古城也志不為  
入宗右馬道長也、江拖 今御製抄本  
替即指也 正合其列宗右馬道長孫  
次郎 沖前也 正合其列宗右馬道長孫  
沖陣中湯有之住也 即指也  
正合之名雖有 正合之正合與是并指  
坑河設有之沖腰物 住國也 住也 住也  
右二品持信也  
右沖成即殿之役也 供水大風也  
及破損也 右也

柏原源大造 河合之右連也 右也  
即日通也 右也 右也

一 京都 即京城也

指現據

右德院棟後府也 正合其列宗右馬道長  
孫次郎二系 沖陣也 正合  
即日通也 住也 右也 正合柏原源  
正合其列宗右馬道長 正合其列宗右馬道長  
沖陣中湯有之住也 正合其列宗右馬道長  
正合其列宗右馬道長 正合其列宗右馬道長

平山城川也書奉終也勅一曰多尤有未  
 也去取上末之候為家依不也且城別物  
 別之平代友所本川船渡一七之所  
 行舟城別也之内所余本也死あり通之  
 也遠也 仰付之也升大城改教之也  
 右之前後所有以也勅也也  
 一 大坂陣陣中法用治茶 法道具宗左馬  
 勝正也也也 法改者也 以是具城別也城系  
 口指入也也今之私封下也也  
 一 私而月代支配法也也

指現棟上之志之執腰哉法也即之也也  
 及之板念伴友也教之通也也也  
 四書也也伊也教之宗左馬也也也  
 右書狀也通也唯今之也也也  
 一 一書也十九年一之利元年一 大坂陣陣也  
 右宗左馬也 父子也也也也也也也  
 也人而也書也配也也也也也 仰付  
 之下也也伊也也也也也也也也也  
 上之也也角念也也也也也也 仰付也也  
 右也也也也也也也也也也也也也

宗右衛門とて可也

一 所上座と云々... 織  
一 元... 織  
織

木村宗右衛門

包書... 弘治九年

包書... 弘治九年

包書... 弘治九年

包書... 弘治九年

弘治... 弘治九年

弘治... 弘治九年

許定書... 伏見町人... 武百艘... 作酒... 自... 書... 右新舟... 永七... 通也書...

形... 同格通... 舟... 信... 運上... 此... 口... 大... 書... 伏上...

為く茲成難哉仕以乃回十一年不家曆三  
 丙午之門續有社以東以而秋山四及上  
 幸之山治在之書私後古來七百艘有之  
 以如新私者來後之連之私減由四百艘  
 或志及因究以乃回九年河治續有柳  
 有社以東以乃新私以信以誰私成以後其  
 以乃之云之并新私以信以誰私成以後其  
 以乃右新丹包之度之私私私私私私私  
 之乃方東洋信以乃付以柳社乃乃乃乃乃  
 之之他借會凡口之由余借借借借借借借

設料滞之乃或乃由乃海乃乃乃乃乃乃乃  
 社以德成乃乃貸附利潤并上本之乃乃  
 并合之乃年會乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 仕乃乃之乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 之乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 以後私據私減及難後乃乃新私以信以誰  
 付乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 書乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 是之乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

其免其存者 亦未下之海以渡渡或百  
 枚之相納言の且又依人新舟是とて通也  
 並に舟伏人新船より相納言運上渡之因也  
 七百枚之流下之自は後依人船増  
 運上之後南申奉之月刻以上納言  
 在七百枚之後も南申之月刻以上奉  
 並に右委細之後も南申之月刻以上奉  
 以是下之其言自是又は後難有在奉  
 仍も清治院文存之可也併

明和八年申年十月廿九日

已書難年考  
 八人考

岩井九左衛門下

渡邊一伊助下

水持武平下  
 思代 奥右衛門下

市右衛門下  
 指 七下

亦奉行所

亦文南申奉之月刻以上奉  
 其二百拾五之三十八重之三ヶ月分各限六也

九百四拾六及九分三厘下毫有雜者不數也

曹仁宗門校書

定

- 一 日本國之虛之偽、後志勇士寧人、一町、  
隠蔽として、与漢不入、宗門也、依、天不  
力、法士、席、下、定、一、条、三、行、其、定、事、
- 一 本寺宗法出、一、並、志、依、之、中、以、為、お、志、と  
り、る、也、若、お、肯、志、行、有、く、未、志、と、其、中  
寺、より、志、方、宗、法、一、行、事、
- 一 虚之偽、渡世、之、後、志、法、出、而、一、也、亦、と、專、と  
依、分、り、一、志、依、物、依、の、事、

虚之指托所は其の  
 多中におもひまはし  
 九はくいふにたす  
 りのり

一 遍修行し内於法は國法なりとて虚之指  
 一 蘇抹之象介し作今も托所障焉  
 一 發出來し子細と改中ちとて  
 一 山といふ不海後とて事  
 一 告來公事

一 虚之指托所は其の又内教一切の指  
 一 教作しとて  
 一 一天節し其の懐叙として指  
 一 虚之指は後とて勇士道歌  
 一 其の法実とて

一 渡私等とて  
 一 虚之指は改して法  
 一 法行跡と改  
 一 若似と虚之指  
 一 虚之指は  
 一 夫ハハ  
 一 外下



僧之戒不并沙弥之事

一 虚之僧大集其力以道进志令其有  
之息交之冷淡中寺并香僧之  
力并集事

一 虚之僧托钵修行同之二人并不断事

一 虚之僧托钵修行之徒者之痛之不厭  
ありといふ一宿未波りあひ  
勿海私欲初の空懸て事

一 虚之僧自然中欲討と云ふを吟味双  
分を柳を修り付けし内務有可  
勿海法士力不不

勿海法士力不不  
仕方修也事

一 法士人と切殺血刀と提寺内然  
重子細と改て何事も或  
法小正任小或士たりとも  
あひ若其罪好日くあ  
後之を為有也事

一 虚之僧と法を欲河方  
細に改拾也下り勿海多  
補元同庵一人と云  
併法士

即一切不立知事

一 虚之僧修行住来々之良馬智ある家り法人  
（西と合と）る者此は是又三立正法事

一 虚之僧修行先之國所書而三立正法  
之極古来し通之流若又眼道より忠  
道より虚之僧有之とて之を急方之味  
下力曲事ね法とてお事

一 住之と離之他國而城下町托鉢修行七  
日之入道面書之用熱而不流事此は  
貴人が托鉢を合案とてる者事

一 托鉢修行之良夫亦も徳あり成行と集め  
色々之修業より為る事

一 虚之僧之修業天下の家正法士之席亦  
之を之より常とて武門之心道と不立行時  
にも還俗して付る西之僧之形と字の内  
心之良士之志とてけり兼て或は修  
行し宗門にて公認も通ふ日中も性  
来自由指し重んじ定書書解

寺廿九寅月 中多上野舟判

板倉修徳書判

堀田松久書下

平定元流書判

卷宗年申改

右田松久書下

物産内脈心下

右松久方為沖意は 作出之類而此老  
中より必お後多平生を母人宗門に  
心乃不て隠事且又宗門にお省軍旅  
有くして不列取上宗門横得て付也

月日

平定元流書判

二松之間堂由緒之覺

一 淺草松之間堂は元來お替所よりお後境と  
り思ふ之地を及んで松平信直が  
りし 仰ふ儀は 此松平信直が  
祖父松平定宗の御代に於て  
寛永十九壬午年より造立霜月廿二日  
お酒より同末本年御後境より村子元相集  
りて築代お取り申す所は松平信直の御代  
百五之内合立ても私方お後不し依り  
心保元甲申年山折沼より松平信直の御代

今より忠方が御旗は張る所付治世を行  
 仕られ相済後成不成符因年十月  
 二日以評定而私并後以 巨木松平伊  
 豆守柳松平が書守柳其有志系元柳朋念  
 不力守柳神尾使守柳四治成の上と堂  
 不忠方を承代とす、不忠方とす、  
 雖も守り又死に仕るる忠方は為御旗使  
 後拂日数り堂地之邊月日心保元甲午  
 十月二日御領仕南年八拾三年代守死仕  
 比後此御旗使事

享保十七年七月堂書 久松

免

- 一 白浪又殺 堂浪
- 一 同 六枚 矢の捨見
- 一 烏目志貫文 燈明代
- 一 同 志貫文 棟代
- 一 右へ通夫殺流河少志貫志と通
- 一 烏目志貫文 板代
- 一 同 志貫文 矢の捨見
- 一 同 志貫文 札代

右ノ通堂前格古ノ方分之法也、勿論堂  
古ノ形者、以縁ノ上ノ方分夫一切對魚ノ  
以ノ通  
右ノ通堂前格古ノ方分夫一切對魚ノ  
以ノ通

本年号月日

右ノ通堂前格古ノ方分夫一切對魚ノ  
以ノ通  
右ノ通堂前格古ノ方分夫一切對魚ノ  
以ノ通

一 神尾飯前古柳石右ノ通堂前格古ノ方分夫一切對魚ノ  
以ノ通

三年十一月日為供養料浪五百目  
供

一 酒造大酒古柳酒田依酒古柳山古柳ノ方分夫一切對魚ノ  
以ノ通  
文成年八月十日為供養料金五百目  
供

一 酒田古雲古柳中斐庄花彈古柳山條女席古柳  
山條古雲古柳山條古雲古柳山條古雲古柳  
山條古雲古柳山條古雲古柳山條古雲古柳

一 山條女席古柳山條古雲古柳山條古雲古柳  
山條古雲古柳山條古雲古柳山條古雲古柳  
山條古雲古柳山條古雲古柳山條古雲古柳



同拾遺

同拾遺方公字九百九十九

同百五

同拾遺方公字

同拾遺方公字

右通劬命刻名頂戴侍元祿十巳年青

之書

一 元祿十巳年十一月廿二日大地震身大破其

後世終焉願一上高家水七寅年七月十日

松中一後身願一上高家水七寅年七月十日

并松木或干挺地松木行付

一 正徳元年十一月廿二日大火焚燒身大破其

丹羽玄白公松野之為松坪内能也也松  
新語上一造官一後元年一通之傳系  
嶽底之一款上一高家水七寅年七月十日  
中山出雲也松也一上高家水七寅年七月十日  
公義以松木子七百一松田平松木一可挺系為  
雖有三百存自也信海也

一 用之松木子七年一海刻命之法公松野也  
幼命在松木子七年一海刻命之法公松野也  
正徳六年六月之造官上高家水七寅年七月十日

信也

右通相遠之說

享保十七年七月 堂守

久右邊

漢單 漢九章

一私步祖之於律國相列德念上承相勤  
尸品而長吏宗之志依乃法勢私之祖文  
死以作作材

右大初類於公而說文系德念八幅官其  
納也此書均之長身刻而分單書付亦且法  
難以依之但先例於今德念八幅其以系  
禮以神奉之立之供奉長吏其為帽子素  
袍或之麻上下之相勤也



一 天守八庚寅年 所入國 出河先祖成統  
 府中為孫右孫會合院相勤了自以上長  
 史宗子元元 作付以上長小田原長史宗  
 左衛門小田原長史宗 出河又長史宗  
 支配之長史宗 出河又長史宗  
 私之祖長史宗 出河又長史宗 仁田村  
 馬長史宗 長史宗 出河又長史宗  
 長史宗 出河又長史宗 出河又長史宗  
 長史宗 出河又長史宗

一 右同年 所入國 出河河馬長史宗 相勤了

作付河馬出河河長史宗 出河又長史宗  
 配之孫川右連長史宗 出河又長史宗  
 依之為出河長史宗 出河又長史宗  
 每年二月十日  
 所城棟上 出河又長史宗 出河又長史宗  
 右不為之 出河又長史宗 出河又長史宗  
 戶分名目 出河又長史宗  
 一 所入國 出河又長史宗 出河又長史宗  
 所老中 出河又長史宗 出河又長史宗  
 所相勤了

一 近先前年下世云津関所張通公私刑  
之通リ在正西書左炊方、上正刑於戴  
仕の張通公事

一 私刑持仕公事、取之廣長庚子年漢列書  
野原公我、正刑私少祖、首取於公抱少良  
集方と申、文字下判為割府系此紫判  
只今後用口少事

一 九拾年、公の焼公撰之志、所減撮上焼公  
細之仕、以殺持方、取戴仕公

一 焼公高、後世仕並地、以收仕中緒、以取、物

町小田原町、取過、以收、者、取、以、拾、又、人、向  
毎日、私、公、以、地、代、高、仕、來、以、淺、草、親、者、市  
場、何、方、之、張、立、以、高、仕、是、是、以、地、代、每、年  
十二月、市、場、仕、來、取、以、焼、公、細、之、并、高、以、依  
近、古、來、以、私、名、以、取、業、以、以、取、以

一 以、役、目、取、勤、以、依、以、以、取、以、用、次、者、以、結、繼  
取、上、以、以、手、系、以、清、陣、右、取、以、薄、以、以、用、業、取、  
以、用、清、者、取、上、以、取、以、以、取、以、取、以、取、以、取、以、  
一 以、仕、並、考、以、以、取、以、以、以、以、以、取、以、取、以、  
以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、

門、諸、川、文、字、形、耳、鼻、刺、切、又、丹、的、回、号、以

少親公給又奉必方石古拾遺狀神尾  
俊守有狀以事以討或列鶴原村磔三  
人其世有法評定所多為付山奉  
書下並檢使去私先祖は元付其法  
傳馬は清長道具物をお勤り此所と  
く多配し内代主方死お事り付言も去  
道方より持りし事

一 坊武部が痛柳山所其の言先祖内記の  
言下唯之の内記名用りし

一 平末年飢饉の時岩付町に戸閉難物云

下言火事し言其言米取載仕は九指  
忠深和川に磔に言行の時も場所を石古  
將並柳合金子取載仕は甲斐左元海舟柳  
取致し言似世順廣難物取載仕は盜賊取  
方未并及取作柳合金子取載仕は其外丹  
寺に書柳合金子取致し言付し捕取し付  
力以獲負合金子拾又其下並事

一 南二月月中 大納言保友乃取取後  
未又白儀洲取法益多其下並別事下  
名之別府死分仕事

一 行入國、出河灣田、為種、出澆之、中、最、  
長、地、以、其、中、之、字、之、字、之、字、之、字、之、字、之、字、  
以、最、上、之、地、之、字、之、字、之、字、之、字、之、字、  
之、字、之、字、

一 私自死有、長吏、之、年、負、田、地、或、以、在、在、  
者、斗、之、年、負、田、地、以、年、負、田、地、以、年、負、  
多、以、死、以、以、水、帳、也、及、載、仕、以、之、不、以、長、吏、治、  
以、負、收、納、仕、以、之、也、以、死、以、事、也、  
右、之、紙、之、方、以、身、以、身、以、書、紙、以、每、方、寫、耳、  
乃、以、古、泥、文、氣、以、相、通、之、以、死、以、之、也、

嘉保十七年一月 淺草 澤九郎

源念友系長吏澤九郎相急寫之

一 長吏 府次 齋 猿樂 法清師  
破塗 土鴉 齋師 過目暗 非人  
穰川 祈根 法指 石切 土意師  
放下 蓋港 酒書 山守 吉倉  
坪之 兼治 墨師 冥書 禮抄  
師森 兼作 假偶師 假城屋  
右、紙、之、方、以、身、以、身、以、書、紙、以、每、方、寫、耳、  
乃、以、古、泥、文、氣、以、相、通、之、以、死、以、之、也、

二乃之湯在風呂を八位味をくわく  
人形をうす大書以外たふく

頼朝河判

法義曰庚子年九月

五心次書付活頼朝の上中

一 宗圖書所撰法法格式段々志と私道と  
來後八流書大湯書初末紙長也也初初段  
二 法相勸諭彈丸書病身有久代と初勸  
以初段と不勇上取平日所用之書運後も  
久代と書誤たり書後住此書自然と格

或は初三流成りて古公書中初初法也  
有初初方力上下と初初勸諭初初平日  
書所初初用多初初初初初初初初初初初  
只今格或は初初初初初初初初初初初初初  
初初初初初初初初初初初初初初初初初初  
初初初初初初初初初初初初初初初初初初  
初初初初初初初初初初初初初初初初初初  
初初初初初初初初初初初初初初初初初初  
初初初初初初初初初初初初初初初初初初

享保曰己亥年二月 法義 彈丸書

右法書初と刀常以後書初初初初初初



前曾祖公棟行友志書 同月廿九日

左心筆付了了事 通言

一 此方私由緒以爲府先進的古說之亦も寫并  
由統書三之通先上之刻明上之懷念之爲  
預之重月之書也四九國之古言解之也  
子之之依勿海路之私而持仕也國之  
四難爲之於戸以爲活故見之之平書而也  
於上之九國之別私也之其古國寺故也之  
之朱平活之判教通而持仕也之五標之

上之五平活之判教

一 此條可教之 時於由并之廣日連上之入刑得  
之古私之祖石連張也之改之之者之國會  
人之也之常活之之古事之法華經之卷之  
之古法之改附之古也之古而持仕也此之古府之編起  
本も也之古事

一 此上之活之古也之抄律之河之助那池田之古  
村長吏之古也之古也之古也之古也之古也之古也  
皮款之古也之古也之古也之古也之古也之古也  
以之古也之古也之古也之古也之古也之古也

清取而持法以仍

清代替之其法亦行以律法存之清  
厥以清員私而進上之戶以兵以清  
清道筋之華款清用法 律法其法  
之知而其為之 故吏去私知法相務

以事

一 光緒二十九年 清法東亞時據謂其為兵  
清法之 清法後之 清上清之 清法私  
清法核計中人 清法相動 清法其法  
取裁仕以 律法其法 律法其法

清上清之 清法其法 清法其法  
清法其法 清法其法 清法其法  
清法其法 清法其法 清法其法  
清法其法 清法其法 清法其法

宣統十七年十月 清法 清法其法

清法其法

一 清法其法 清法其法 清法其法  
清法其法 清法其法 清法其法

一 清法其法 清法其法 清法其法

一 清法其法 清法其法 清法其法



一 四等、各所不用浪去意文、  
御禮、御礼

御事

一 軍成、梅夫、言因、人、御、積、  
御事、御事

例、  
御事

一 御、  
御事

一 御、  
御事

事

一 御、  
御事

一 御、  
御事

一 御、  
御事

御、  
御事

御、  
御事

御、  
御事

御、  
御事

御、  
御事

享保十七年十月

淺草

澤村

右之者其此方是居在根去就作付待  
 別外之通下様方之候在知以上十年以來  
 後湾一併に後様方一通に付付と云通に  
 以付以下様方之候に 却知は持たる者  
 乃前候に在存候に在知別款書一通に  
 今沙留人の上

二加所  
 物之知所  
 木枕所

勘三郎  
 竹之屋  
 勘次

享保九甲辰二月

大目録前書  
 諏訪大目録書

右殿二月廿六日勅之所行、恩勅は二人宛に  
相済水陸和泉寺殿、上九回四月十日右殿書、  
通下様書付付名、所和泉寺殿、通下様書  
付取書恩因十一日和泉寺殿、上九回中、内  
宗令、勅之所行、恩勅は所出、上九回、  
合書、通下様書付付名、所和泉寺殿、  
為後之、所行、恩勅は所出、上九回、

所行、恩勅は所出、上九回、  
所行、恩勅は所出、上九回、

右徳院様御代寛永元甲子年二月廿九日

所行、恩勅は所出、上九回、

所行、恩勅は所出、上九回、

所行、恩勅は所出、上九回、

所行、恩勅は所出、上九回、

所行、恩勅は所出、上九回、

所行、恩勅は所出、上九回、

所行、恩勅は所出、上九回、

所行、恩勅は所出、上九回、

所行、恩勅は所出、上九回、

所行、恩勅は所出、上九回、

所行、恩勅は所出、上九回、

山城様と為 正法應住持自圓白黄文系  
吉地全入後志衣蒙取裁住只今と大切持  
来以以言是居堪所与住以所属三丁目年  
正月十日款焼住向因又月系取之也リ  
内裏様は江为 白符牌は是新後志太  
教并後志は住住如内獲火牌の石とリ  
及と系下重山衣蒙取内三拍此系系与德  
全蒙主全浪高為後志は蒙本頂裁住  
九月廿南地は名湯丁千回年一与是役  
と相勤以方治之成成年死去住以

二代目

将取和勤之部

一十二系分廿八系と十七年一与是役取  
勤以以言是祖布村竹之也役以勤之部  
中子与是役取以落之也紋所也也一青  
屋所刻是役取以是只今之と相續住

二代目

将 勤之部

今午年一与是役取勤以

二代目

将 勤之部

延宝六年一与是役取元年と七年一与是役

没相勅尸以後没相住為中村傳九郎

又代目 惣 勅二所

貞享元年分元禄十四年と十五年  
月去又没相勅尸

六代目 才 勅二所

元禄十四年分只とと在又没相勅尸

元祖勅二所分只とと一奉教百貳年

其居相没相住其祖云云後古來分住其居

續相云住其居

享保十三年一月 保所 勅二所

寛永元年分享保十一年と九日

市村行中緒書云云

其元 村分又二所

左

此の生國象列城云云向若年分秋

故其住元清南地無昌指云云

下り右亦有其故其居云云頼中相叶

其相勅及云云人云其能云同相云

其居與行住右又二所後私其居云云

祖云其居云云仍又二所子孫只今云私

其居云云仍又二所子孫只今云私

明徳寺

一 兼盛元主辰年一右又三所病死は月舞  
村田九房右衛門とく久代とおる右村守  
左衛門并辰保とくその相成えらるる  
其居相續仕ははる上なる彌小方舞  
味線と藝名とも張下り一處死く  
祖云と振へお勤り且又右近涼左衛門  
辰上右方の張下練治と湯帷とく  
女方とり敷といは芝居なる  
右市村守左衛門子竹と形下り  
河分暮

町とる玉川主膳とく辰上とく  
芝居お初とく辰寛又甲辰年始とく  
昔續とく相續とく振仕とく  
前とく  
く私方とく大芝居とく世とく  
大敵院棟 巖有院棟  
乃 辰上とく右又三所  
頂戴仕ははる  
く世とく辰上とく  
く世とく辰上とく

一 千餘枝芝居根之村之又三郎 伊勢之國  
始の取立の公業八代白年救九十八年藤  
公右衛門守左衛門とり八代分竹の由と名氏  
ありとめ只今とむりお續仕合又三郎  
私芝居之元祖ありと名氏

源 村山又三郎  
昏 村田左衛門  
昏 市村守左衛門  
昏 市村竹之丞  
昏 市村守左衛門

六代目 市村竹松  
七代目 市村長三郎  
八代目 市村竹之丞

享保十七年六月 租金元 竹之丞

泰田劫盗申緒書之完

一 私芝居取立の年救後万治二庚子年分  
南巳ノ年之と年救公十六年一私成ノ  
右房之清とり右本撰所又了目之芝居

九所<sub>ノ</sub>下<sub>ノ</sub>私<sub>ノ</sub>祖<sub>ノ</sub>坂<sub>ノ</sub>東<sub>ノ</sub>又<sub>ノ</sub>九<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>將<sub>ノ</sub>二<sub>ノ</sub>男<sub>ノ</sub>亦<sub>ノ</sub>七<sub>ノ</sub>と  
五<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>云<sub>ノ</sub>請<sub>ノ</sub>書<sub>ノ</sub>を<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>田<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>は<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>  
一<sub>ノ</sub>は<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>又<sub>ノ</sub>九<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>方<sub>ノ</sub>五<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>云<sub>ノ</sub>請<sub>ノ</sub>書<sub>ノ</sub>を<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>  
五<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>云<sub>ノ</sub>請<sub>ノ</sub>書<sub>ノ</sub>を<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>田<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>は<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>  
只<sub>ノ</sub>今<sub>ノ</sub>一<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>は<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>田<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>は<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>  
右<sub>ノ</sub>五<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>云<sub>ノ</sub>請<sub>ノ</sub>書<sub>ノ</sub>を<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>田<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>は<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>  
只<sub>ノ</sub>今<sub>ノ</sub>一<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>は<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>田<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>は<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>  
九<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>云<sub>ノ</sub>請<sub>ノ</sub>書<sub>ノ</sub>を<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>田<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>は<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>

享保十七年六月  
南交 劫汰  
又九所

右<sub>ノ</sub>五<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>云<sub>ノ</sub>請<sub>ノ</sub>書<sub>ノ</sub>を<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>田<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>は<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>  
享保十七年六月  
相<sub>ノ</sub>為<sub>ノ</sub>少<sub>ノ</sub>云<sub>ノ</sub>右<sub>ノ</sub>五<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>云<sub>ノ</sub>請<sub>ノ</sub>書<sub>ノ</sub>を<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>田<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>は<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>  
有<sub>ノ</sub>く<sub>ノ</sub>前<sub>ノ</sub>十<sub>ノ</sub>二<sub>ノ</sub>年<sub>ノ</sub>以<sub>ノ</sub>前<sub>ノ</sub>年<sub>ノ</sub>二<sub>ノ</sub>月<sub>ノ</sub>一<sub>ノ</sub>日<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>城<sub>ノ</sub>中<sub>ノ</sub>  
後<sub>ノ</sub>五<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>云<sub>ノ</sub>請<sub>ノ</sub>書<sub>ノ</sub>を<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>田<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>は<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>  
長<sub>ノ</sub>右<sub>ノ</sub>五<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>云<sub>ノ</sub>請<sub>ノ</sub>書<sub>ノ</sub>を<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>田<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>劫<sub>ノ</sub>汰<sub>ノ</sub>は<sub>ノ</sub>仕<sub>ノ</sub>裁<sub>ノ</sub>



此等之役方之於今者、以法其不也成之程、  
志動之那竹、也劫尔三人、何程之程之任、  
事

新吉原根之寛

一新吉原町、成法以役所、向之、法不也知、  
付享保十年、七月、吉原江戸所、名目、  
亦在也、お為、少、老、通、書、付、大、是、紙、前、  
也、方、は、名、目、記

寛

一 慶安年中、  
中城、定、口、依、城、町、  
中、新、之、新、宛、所、  
中、新、之、並、集、口、  
一 概、所、八、所、目、  
色、依、城、町、拾、口、又、新、有、

一 豫倉河右田

一 大橋の内柳町と戸所は豫倉右武拾新程  
右大橋の内と戸所は今も常盤橋河川  
名と大橋と戸所は柳町と戸所は道之河右  
毎ては戸所は比京路万里小路と橋と  
而して城屋も有るは是と京之元末と戸  
名天心年中は比大橋町と戸所は京路  
松女町と名と借用の少くは多しは是  
大橋の内柳町と戸所は其町と名と本柳  
二町と名と取直して町と名と本柳町と名と

右柳町は豫倉右と名と江南地也其  
者左の少くは戸所は豫倉河右は豫倉右  
四戸は豫倉河右府中と名と本柳町は  
川越の少くは戸所は比京路万里小路と橋と  
舟伏見夷町と名と本柳町は比京路万里小路と橋と  
武新二軒は比京路万里小路と橋と

一 昔も長十年は比京路万里小路と橋と  
舟柳町と名と本柳町は比京路万里小路と橋と  
比京路万里小路と橋と  
道橋本柳町と名と本柳町は比京路万里小路と橋と

舟く山廻り山江戸日増し無昌付依城也  
お後仕依城所も場所也中一方申所法也  
以故去山見洋之を難事

一 古以衣目志老第と申考姑の山所法と云  
京師大坂渡河は外法也津藩也無昌成  
場所先親分御免依城所也申所  
有く山廻り山江戸日増し無昌付也  
宜り山依城所也山廻り山江戸日増し無昌付也  
山廻り山江戸日増し無昌付也  
山廻り山江戸日増し無昌付也

二十條完

一 槍めと申あそひ少の槍具槍文小物也  
男の分派と不承家職と忌道と不承儀  
屋入を長指仕は依城也後申事  
方分金銀と云ふ法也其日也面也  
池也仕は然る所のつとて人親可也  
と大判川原横領法事ハ依城也其金銀  
浪費日也面也其法也其日也面也  
所定と申少も唯今と有来前と依  
城也其日也面也其法也其日也面也



一 近年世に静澄活りといふも色濃別  
平均し事事も道なきは自ら就きて  
及ばばい思事ととれ全言法海人海に  
此れを存いた秋成思意に然人自と思ひ  
恒如とも不だ定流渡りて存に抱女をよ候  
全海とてたきぬく其も新授成は候  
言此の幾日も而重り右に此の法所  
方こそ抱女をたに私言事も雖斗此か  
南にといふ不中法が大成候はとて南  
かゝ所も抱女を揚てを所も言此

而抱女をともかたり存者なりと  
此全の者なりともたもとて此全の者  
とてなはば方す此道候所なり  
なりともはあはれ入候なりと見  
者候場所法候細しとて此全の所  
此候者なりとて此全の所  
所公儀候者なりとて此全の所  
此全の所なりとて此全の所  
右此全の所なりとて此全の所  
通此全の所なりとて此全の所

劫盜流賊之徒以爲評定所也  
依酒書柳書爲度之通商各等之  
事也 作付名也 作此

一 元和二年三月十日傳有本志大馬依澤  
定取之也 正書多依酒書柳法書以柳列  
度爲新川之通依城町之場所爲 條者  
雖有之書各自也 作酒以之書本志大馬也  
作付も依城町之場所一ヶ所ありて人等  
四町中一役之不及也 此の邊に遊捨女居  
て其一切の重なる者ありて大依城者も其の

本志大馬并依城町も其役目にて是者  
以て其の條は新川名也 作付書其役  
通

又今条も是

一 依城町も依城町高書酒度魚之役并依  
城町之内に何方を雇來其役先之依  
城者事也 向後一切の役も其事也  
一 依城町也一日一取ありて其役も其  
事也

一 依城町も依城町高書酒度魚之役并依

昌翁の行状ありとも緝心深用百事

一 傾城町家御書清木高藤氏今次所没

お八江戸町之格成之趣も方お勅言事

一 或士商人稱々名浪所提々次不書

たりりの流継細い白住所被成味不書

見たりも所は海にお事

右ノ通名方お事也

月日

奉行

一 田村の事あり矣念とキミカテ、之は念也

古来大人に慥心云云、抱女屋、事主

一 田村の事あり矣念とキミカテ、之は念也

事とキミカテ、之は念也

女と書さるる事、長十一年、此後所

如所、事あり、事あり、事あり、事あり、

お人とりをさるる事、事あり、事あり、

同名あり、事あり、事あり、事あり、

事あり、事あり、事あり、事あり、

お別小田原、事あり、事あり、事あり、

事あり、事あり、事あり、事あり、

所信存候

一 ぬきや所存、事あり、事あり、事あり、

けし取浪の葎草くし生茂りゆと新地形を鑑  
ふしむ葎草くし久付の葎草目なる文字の取  
右京と書替りゆ元和三年の地形書に葎  
の掛りゆ同日年一書月の中ふ初め一回高  
常任信

江戸所二丁目

右江戸所と久付の葎草くし一統葎草  
園基はは葎草所ぬ江戸の葎草葎草  
所も葎草くし葎草葎草江戸所  
久付の葎草初柳所一葎草くし南所

集りゆの葎草くし葎草くし南所葎草

同二丁目

右武所目ハ葎草河葎草葎草くし葎草目  
移りゆ

京所一丁目

右京所葎草葎草くし葎草葎草葎草  
目ハ葎草葎草葎草くし葎草葎草葎草  
葎草

同二丁目

右葎草葎草葎草葎草葎草葎草葎草



水之南に依城をたてたりは所、後、  
この多有、一、五年、  
町とありあり

南町

一、  
右南町と云付、  
依城をたて、  
一、  
右南町と云付、  
依城をたて、  
一、  
右南町と云付、  
依城をたて、

法言、  
本境、  
右南町、  
依城をたて、  
一、  
右南町、  
依城をたて、  
一、  
右南町、  
依城をたて、

修漢

- 一 唯今二所可方、備所代地少、又別增  
了、武町三所、備所系不、重事、
- 一 唯今三處汗、高貴仕、自今、重秋  
在、高貴、清、免、格、事、
- 一 川料、七、清、金、三、方、及、千、西、系、重、但  
小、為、三、間、有、拾、百、兩、
- 一 市町中、武、白、粉、余、五、一、以、風、呂、屋、在、悉、之  
以、清、一、格、以、事、一、以、美、右、風、呂、屋、在、格、免  
洗、女、之、及、付、右、京、町、傾、城、以、一、一、格、女

抱、重、色、秋、高、貴、仕、自、悉、之、信、四、以、  
格、付、事、

一 是、方、以、是、以、有、右、大、之、高、格、免、清、事、町  
級、清、免、格、付、事、

一 同、年、十、月、廿、七、日、淺、原、清、院、右、京、町  
系、免、方、右、月、行、事、一、系、免、金、取、戴、仕、格、免、  
事、

一 右、京、町、以、右、右、顏、一、一、年、南、年、一、後  
何、之、手、通、三、格、免、以、年、一、月、中、之、一、以、鐵  
只、有、由、四、折、以、一、一、以、通、以、格、免、

一 昭曆三年正月十日甲申中夜守命火燒  
中教場之屋其燒失住依止之屋其  
行柳也云 石有之方之大火有西君之  
云云弘作付之名于高小在掛波高貴住  
云住酒小在付高貴住事一

一 同來一月不若均無柳者根源在東柳日  
本境之越江抱新古也 場而買分  
此後事一

一 同來六月十日甲申中夜守命火燒  
中教場之屋其燒失住依止之屋其  
行柳也云 石有之方之大火有西君之  
云云弘作付之名于高小在掛波高貴住  
云住酒小在付高貴住事一

一 昭曆三年正月十日甲申中夜守命火燒  
中教場之屋其燒失住依止之屋其  
行柳也云 石有之方之大火有西君之  
云云弘作付之名于高小在掛波高貴住  
云住酒小在付高貴住事一

一 昭曆三年正月十日甲申中夜守命火燒  
中教場之屋其燒失住依止之屋其  
行柳也云 石有之方之大火有西君之  
云云弘作付之名于高小在掛波高貴住  
云住酒小在付高貴住事一

道と申すは古より大門とて方なりは坂と夜  
紋坂と申すは若菜所と申す若菜は色多  
くは夜紋と申すはくろくは夜紋坂と申す  
申すは初繩渡と申す大門と申すは古より  
乃と付くは夜を津尾坂と申すは古より  
道と三曲りて作らる

一 新若菜所は江戸所と申す目田二丁目京町  
三丁目目田所目南町は今所は元若菜  
分有来りは町と申すは町と申すは元若菜  
町と申すは元若菜と申すは町と申すは元若菜

又町と申すは二町二町宛揚屋は元若菜  
若菜移り申すは場所廣く成るは揚屋  
と申すは二町集揚屋町と申すは元若菜  
南町と申すは元若菜と申すは町と申すは元若菜  
は事

保町

一 右保町と申すは新若菜の越寛文八年  
申すは中江町二丁目名目町今江所  
江と申すは若菜と申すは内切新屋は  
保町と申すは名付申すは町と申すは常女は

此所産の婦人、法上の系を捨去する者  
系町、徳文、体、乃、子、後、新、法、印、上、系、成  
捨去する者、七十余人、方、今、古、系、上、入、也  
り、依、り、た、り、と、作、は、者、在、借、宅、新、法、也  
尸、事、

### 伏見町

右伏見町、後、徳、町、と、名、を、以、り、因、町、と  
新、法、作、り、伏、見、町、と、名、を、付、り、以、り、以、り、戸  
町、武、町、目、と、年、去、者、多、く、以、り、因、伏、見  
或、ハ、撰、者、在、多、有、り、以、り、在、右、と、新、法、系、

### 古、町、と、付、り、

- 一 元、古、系、大、門、は、も、獨、り、後、捨、去、四、割、  
禁、り、し、り、礼、者、以、り、新、法、系、上、入、也、以、り  
も、大、門、は、も、礼、者、以、り、以、り、後、元、祿、  
七、年、戊、土、月、日、は、捨、去、者、多、有、り、以、り、  
以、り、以、り、以、り、以、り、以、り、以、り、以、り、以、り、

### 印、文、言、

- 一 此、以、前、不、制、禁、り、通、江、戸、町、と、獨、り、以、り、捨、去、  
妾、女、後、法、印、子、と、番、町、日、一、戸、町、以、り、  
後、よ、り、と、せ、り、也、

戊十月

一竹者、以馬家地醫法、外一切之用  
附池長刀門内、虫、為信心者也

戊十月

町同心

大久保辰次郎及

以檢使

中津長六郎及

正徳九年丁卯七月十日陽高札建始

西文之見

一前、小制禁、  
江戶所中瑞、

抱如、款限、  
重今、以、  
又、人、組地、  
主、と、西平  
と、あ、こ、あ、り

一醫、昨、  
不、行、者、  
以、以、系、地、  
一、切、之、用、  
及、か

魚

池  
池長刀門内、虫、為信心者也

卯七月

町同心

永井友兼及

以檢使

古柳俊美及

一保田、越、前、書、柳、以、  
中、年、行、職、  
之、以、元、禄、十、二、年  
二、月、十、二、日、日、中、境、  
之、上、西、所、方、  
十、二、日、辰、辰、辰、辰、

侍尔抗初白以互以

町田公 中田平兵衛  
以拾使 右田右兵衛

今并九代御代元

右水代御代  
上野十之助

印侍尔抗文言

江尾南之方古之江所方附南方  
江尾少之方印代友而附 山方

右印侍尔抗換之方京保之方成六月廿日

江尾南之方

町田公 中田平兵衛  
以拾使 右田右兵衛

江尾南之方

江尾南之方 古之江所方附南方  
江尾少之方 古之江所方附南方  
江尾少之方 古之江所方附南方

日中提侍尔抗分重天町木戸際と長可原間

二百拾又為武大也水一方二種所引之  
者其四百為余於今十三所余新在東大因分  
水道原之原四百二十又為橫幅原四百十  
間內坪數約合武力七百六拾七坪  
元和三年依城町之場所系一區以曆甲  
年之四十年

以曆三百年本日不境、江越、保十七年之  
六拾九年、數百九年  
右古東宮基、次有先祖、古東宮、古東宮  
日記、古東宮、古東宮、古東宮、古東宮、古東宮

私親公に傳え、之、書記、古東宮、古東宮、古東宮  
傳、大、概、右、通、之、可、知、難、以、上

享保十年七月

新古東宮  
亦在東

名目  
又在東

名目  
又在東

名目  
又在東

名目  
又在東

名目  
又在東

名目  
又在東

名目  
又在東

名目  
又在東

名目  
又在東

名目  
又在東

苗名目





